新修女子國學史

42441
教科書文庫
4
810
42-1939
20000
35909

資料室

教科書文庫
4
810
42-1939
2000035909

375.9
Sa14

昭和十四年一月十六日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

女子學習院教授 佐成謙太郎著

新修女子國文學史

中等教科書協會 閲

星野書店版行

広島大学図書
2000035909

源氏物語絵巻

廣島大學圖書之印

廣島大学教図書
35909

源氏物語繪卷は、鳥羽天皇朝に於ける大和繪の大家藤原隆能の筆と傳へられ、色彩を本位として靜かな情趣を表現した、いかにも美しい繪卷である。こゝに載せたのは、「宇治十帖」東屋の一段で、宇治の中君が髪を梳づる前で、右近が物語を讀んでゐるところである。

（尾張德川侯爵家所藏）

はしがき

一、本書は昭和十二年三月改正せられた教授要目に準據し、高等女學校用國文學史教科書として編述したものであります。

一、文學史の大切な任務は、時代の推移とその特性、及び文學作品の歷史的地位を明らかにするところにあると思ひますから、本書では、時代の區劃をやゝ細かくし、作品はその時代々々の史的地位に從つて排列して、この任務を達するやうに努めました。

一、本書は、女性の文學史的地位について成るべく委しく記述し、一般文學史の缺陷を補ふやうに心掛けました。

一、本書に擧げる作家・作品については成るべく具體的に記述し、且作例を多く揭げました。文學史のやゝともすれば空疎な記事

に終る通弊を恐れたからであります。

一、作例は、その作家・作品の特徴を示すものであると共に、成るべく女性に適した、且生徒の自修だけでほゞ領解し得るものを擇びました。

昭和十三年十月

著者しるす

新修女子國文學史

目次

序說……一—七
一　文學の本質……一
二　國文學史の意義……二
三　時代の區劃……四
第一章　大和時代前期——文學口誦時代……七—一四
一　概說……七
二　上代說話……九
三　上代歌謠……一一
四　祝詞……一三

第二章　大和時代後期——文學記載時代……一四—二九
一　概說……一四
二　記紀・風土記……一六
三　祝詞・宣命……二〇
四　萬葉集……二三
第三章　平安時代初期——國字文學展開時代……二九—三八
一　概說……二九
二　謠ひ物……三一
三　和歌の進展……三二
四　散文學の展開……三六
第四章　平安時代盛期——散文學與隆時代……三九—四九
一　概說……三九

二　和歌の沈滯……四一
三　物語の進展……四二
四　源氏物語……四三
五　日記・隨筆……四六
第五章　平安時代末期——文學傾向轉換時代……四九—六一
一　概說……四九
二　物語・日記の低下……五一
三　史傳文學の興立……五三
四　和歌の革新……五七
五　謠ひ物の流行……六〇
第六章　鎌倉時代——武士文學與隆時代……六一—七七
一　概說……六一
二　前代散文學の繼承……六三

三　和歌の趨勢……六五
四　説話文學の展開……六八
五　軍記物語の新興……七一
六　謠ひ物の流行……七四
七　連歌の獨立……七五
第七章　吉野・室町時代——劇文學成立時代……七七—九七
一　概説……七七
二　吉野時代の文學……七九
三　連歌の大成……八六
四　お伽草子・幸若……八九
五　謠曲……九二
六　狂言・小歌……九五
第八章　江戸時代前期——庶民文學普及時代……九八—一二三

一　概説……九八
二　俳諧の大成……一〇〇
三　小説の發展……一〇四
四　淨瑠璃の成立……一〇六
五　古學の復興……一一〇
第九章　江戸時代後期——國學興隆時代……一一三—一三四
一　概説……一一三
二　俳諧の消長……一一五
三　狂歌・川柳の流行……一一八
四　小説の變轉……一三〇
五　淨瑠璃・脚本・謠ひ物……一三四
六　國學の興隆……一三七
七　和歌の更新……一三〇

第十章　明治・大正時代——新文學更生時代……一三四—一五四
一　概說……一三四
二　小說……一三七
三　戲曲……一四四
四　和歌・俳句……一四七
五　長詩……一五一
第十一章　現代……一五四—一五六
附錄
國文學展開系統表
國文學史年表

（目次終）

廣島大學圖書之印

新修女子國文學史

佐成謙太郎著

序說

一　文學の本質

文學は、人の精神生活を言語・文字で表現したものである。

梅の花咲きて散りなば櫻花つぎて咲くべくなりてあらずや

○梅の花—萬葉集卷五、藥師張福子の詠。

「萬葉集」のこの一首を見ても、自然を友とし、四季の變化を愛した、平和な樂天的な、わが上代人の生活が忍ばれるであらう。

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

芭蕉のこの一句を見れば、何のとりえもない醜い「枯枝」「烏」のやうな景物にも、いひ知れぬ幽玄の詩美を感ずるであらう。僅か三十

一字や十七字の短詩形でも、人々に強い感動を與へるのが、勝れた文學作品である。

すべて藝術は、音樂でも繪畫・彫刻でも、作者の強く感じ深く考へてゐる事を、或形で表現したもので、その勝れた作品はいづれも、人々に強い美的感動を與へるが、音樂・繪畫・彫刻などの表現手段としてゐる音響・色彩・形態などに比べて、文學の用ひてゐる言語・文字は、元來人の思想・感情を表現するのに最も適當した、しかも各國それぞれ特有のものであるから、文學はすべての藝術の中で、人の精神生活を最も綿密正確に表現した、且最も豐かに國民的內容を盛つたものであるといはれる。即ち國語・國文で書かれた國文學こそは、わが國民性、わが日本精神を最も顯著に具現したものといはなければならない。

國文學史の意義

「古事記」を讀み、「萬葉集」を繙けば、皇室・國家を中心として上下相融和し、自然と人生と相調和した、わが上代人の生活が髣髴として眼に浮かんでくる。「源氏物語」・「枕草子」に接すれば、國民感情が文化の發達とともに愈洗練せられて行つて、纖細な情趣を特に尙ぶやうになつた平安貴族生活が、さながらに想察せられる。やゝ下つて、「平家物語」になると、微妙な感情とともに堅固な意志を重んずるやうになつた武士生活が詳しく語られてゐる。かうして、時代を追うて次第に展開して行く國文學の跡を辿れば、我々の遠い祖先から、次々の父祖が、前代の業蹟を受け繼いでは、更に新しいものを次々に加へて來た精神生活展開の經路を究めることが出來る。

國文學史は上下三千年に亙つたわが國文學生成發達の經過を究めて、日本精神の眞髓を明かにし、將來愈輝かしい日本文化を建設して行く方途を見究めようとするものである。

時代の區劃

永い歴史は、これを幾つかの時代に分つて、その推移と特性とを見究めなければならない。本書は、社會の變遷と文學の特性とを併せ考へた上、次のやうに時代を區劃して、講述することとする。

一、大和時代前期――文學口誦時代

國初以來、崇峻天皇の末年(一二五二)頃まで。上下一に和して、國土を愛し、國家の興隆に力め、やがて外來文化を輸入して文化の擴充を圖つたが、未だ文字の使用に慣れず、說話・歌謠等の文學を口づから傳唱した時代。

二、大和時代後期――文學記載時代

推古天皇の御卽位(一二五三)頃から平安奠都の前年(一四五三)頃まで。漸く漢字の使用に習熟して、これを以て國語を寫すことを工夫し、前代の口誦文學を文字に記載し、且國文學の中軸となる和歌の發展につとめた時代。

三、平安時代初期――國字文學展開時代

桓武天皇の延曆十三年(一四五四)平安奠都の頃から朱雀天皇の末年(一六〇六)頃まで。外來文學が愈盛んになる一面、國字假名の發明と共に、國文學意識が强くなつて、和歌の價値を再認識し、和歌を中心として各種の散文學を創作した時代。

四、平安時代盛期――散文學興隆時代

村上天皇の天曆元年(一六〇七)頃から、御堂關白道長の薨去した後、一條天皇の萬壽四年(一六八七)頃まで。平安京は泰平に惠まれ、藤原氏は同門相競うて女性の教養につとめ、多くの女流作家が輩出して、香りの高い貴族生活を表現した各種の散文學を創作した時代。

五、平安時代末期――文學傾向轉換時代

後一條天皇の長元元年(一六八八)頃から、源頼朝が幕府を開く前年(一八五一)頃まで。藤原氏が次第に衰退して、源平の武士が漸く勢力を得、從つて貴族文學は末期的のものとなり、武士文學がやゝ萠芽を見せて來た時代。

六、鎌倉時代――武士文學興立時代

頼朝が幕府を開いた後、後鳥羽天皇の建久三年(一八五二)頃から、北條氏の滅亡した後、醍醐天皇の元弘三年(一九九三)頃まで。武士が新しく社會の上層に立ち、從つて武

士に適當した樣々の文學形態の工夫せられた時代。

七、吉野・室町時代――劇文學成立時代

後醍醐天皇の建武元年(一九九四)頃から、德川家康が幕府を開く前年(一二六二)頃まで。その初め、對蹠的であつた武士文化と貴族文化とが融合して、文質剛柔を兼ねた綜合的文化が成立し、文學も亦綜合藝術の劇文學に到達した時代。

八、江戸時代前期――庶民文學普及時代

家康が幕府を開いた、後陽成天皇の慶長八年(一二六三)頃から、江戸文化の充實した將軍吉宗の末年(一四〇三)頃まで。京阪を中心として、各種の民衆文學が創作せられ、庶民階級に廣く流布した時代。

九、江戸時代後期――國學興隆時代

櫻町天皇の延享元年(一四〇四)頃から、王政の復古した慶應三年(一五二七)頃まで。江戸文化は次第に爛熟頽廢して軟弱な文學の流行する一面、古典を研究して日本精神の本源を探らうとする國學の興隆した時代。

一〇、明治・大正時代――新文學更生時代

明治元年(一五二八)頃から、大正十五年(一五八六)頃まで。明治維新と共に、舊弊を一掃して、盛んに歐米の文化を輸入し、制度・文物は日に新となり、國運は愈〻隆昌に進み、文學も亦全く舊態を脫却して、各種の新文學を創作した時代。

二、現　代

第一章　大和時代前期――文學口誦時代

一　概　説

原始文學は有史以前に溯る。わが國の神話や歌謠も亦、太古、神武天皇が大和國橿原に皇居を奠め給うた紀元元年以前から、既に存在してゐたことであらう。尤も、古代の文學は、口づから言ひつぎ語り傳へて行く口誦の文學であつたが、しかし、その傳唱は、後代の我々が考へるよりも遙かに忠實に維持せられて行つたもので、奈良時代の「古事記」・「日本書紀」等に筆錄せられた、わが上代說話・歌謠

は、太古からの口誦を忠實に保存して來たものと信ぜられる。即ちそれらの說話・歌謠等には、海外文化の影響を受けてゐないわが上代人の純日本的な精神生活を窺ふことが出來るのである。

さて、わが國は、風土の關係上、天產物の豐かな熱帶地方のやうに逸樂空想に耽ける餘裕もないが、また寒帶地方のやうに陰慘な風雪に脅かされる苦惱もない。適度の勞作をすれば、相當の收穫を得て、安全な生活を營み得る國柄である。朝は日出とともに起き、野に出て働き、夕は日の西に傾くのを見て、わが家に歸つて憩ふ。春は花を眺め、秋は紅葉を稱へながら、耕し收める。自然と人生と步調を一つにするのである。また地理的關係から見ても、日本は海洋に孤立した島國であるから、外敵に襲はれる憂へがなく、從つて異民族に對する憎惡嫉視の感情を誘發せられない。たゞひたすら皇室を中心として協同和睦、平和な生活を續けて行つた。わが

二

上代說話や歌謠はかうした環境から生まれ出たのである。

上代說話

上代の說話は神話と傳說の二から成る。神話は神を對象とした說話で、その中には多分に想像的要素を含んでゐるが、それは民族的信仰・國民的思想を具象的に反映したもので、その內容の如何によつて、その國々の民族精神・國民理想が基礎づけられて行くのである。そして、わが日本神話の顯著な特色は、國家說話が基本となつてゐることである。即ち造物の神、伊弉諾尊・伊弉册尊は大八洲國及びこの國に必要な山川草木等を生み給ひ、次で天照大御神・月讀尊・素盞嗚尊の三柱の貴い御子を生み給うたのであつて、こゝにまづわが國土の貴い所以が明らかにせられ、皇室と國家との離れることの出來ない由來が示されてゐる。皇祖神天照大御神の御仁慈・御勤勉・御寬容は國家の理念を具現し給うたものであり、その

皇孫瓊瓊杵尊に下し給うた神勅は、寶祚の天壤無窮、天皇の萬世一系を闡明し給うたものであり、素盞嗚尊の寶劒獻上、大國主命の國土奉還は、萬民歸一の日本精神を如實に示されたものである。その外、一般的な說話に於ても、祖先崇拜・淸淨明直・溫和寬仁・協力進取等の國民性が隨所に語られてゐる。歷史時代に入つた後の傳說も亦、建設的・進取的な國家說話が中心となつてゐて、殊に神武天皇の御東遷や日本武尊の御征夷については、幾多の明朗な瑞兆や興味の深い物語が傳へられてゐる。

天照大神乃ち天津彥彥火瓊瓊杵尊に八坂瓊曲玉及び八咫鏡・草薙劒・三種の寶物を賜ふ。又中臣の上祖天兒屋命、忌部の上祖太玉命、猿女の上祖天鈿女命、鏡作の上祖石凝姥命、玉作の上祖玉屋命、凡て五部の神を以て、そひ侍らしむ。よりて皇孫に勅して曰はく、葦原の千五百秋の瑞穗の國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治せ。行矣。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮なかるべし。（日本書紀）

○五部―五の氏族の長。

○行矣―無事で幸福であれ。

三　上代歌謠

上代の國民的信仰や社會的事象が神話・傳說として語り傳へられる一方、その個人的又は集團的な喜悅・驚異が美的詠歎となり、律語的に表現せられて、歌謠が生まれ出で、こゝに散文と律文と二樣の文學が成立する。そして、わが上代の歌謠は「古事記」・「日本書紀」に收められて現存してゐるものが二百餘首の多きに上り、歌謠生成時代の樣々の形態・內容を詳しく傳へてゐる。まづその形態を見れば、わが歌謠は短句と長句との交錯をもつて律格をあらはしたものので、その字數もやがて短句は五字、長句は七字を標準とし、更に短長各一句を一聯として、これを幾度か繰返して、終りを長句一句で結ぶやうになつた。かうして、わが歌謠は、五七・七（片歌）　五七・五七・七（短歌）　五七・五七・五七…七（長歌）といふ、三樣の形態に整つたのである。次にその內容を見れば個人的な思慕・讃歎・哀悼を抒べたも

の、集團的な協力・愉樂を敍べたもの、又は對話的に問答體をとつたものなど、多樣の方面に亙つてゐるが、現實生活から離れた敍景歌は未だ殆ど見られない。いづれも明朗な性情から生活感情を赤裸々に表現したもので、悲觀的なものは殆ど無い。修辭も既に疊句・譬喩・枕詞等の技巧を用ひてゐるが、その譬喩に卑近なものを取つてゐるのは、彼等の詠歎が常に生活に卽してゐた現れである。

やくもたつ出雲八重垣　つまごみに八重垣つくる　その八重垣を　（素盞嗚尊）

天なるや弟機織の　頸懸せる玉の御統　御統の穴玉はや　み谷二わたらす　阿遲志貴高日子根の神ぞや　（下照姫命）

みつみつし久米の子等が　粟生には韮一本　其根が莖其根芽つなぎて　擊ちてしやまむ　（神武天皇）

はしけやし吾家の方よ　雲居たち來も　（日本武尊）

（にひばり筑波を過ぎて　幾夜か寢つる　（日本武尊）
かゞなべて夜には九夜　日には十日を　（御火燒の老人）

○出雲八重垣―立ち起る雲が幾重も垣根となる。
○つまごみに―夫が籠り住む爲に。
○御統の穴玉―首輪の穴玉のあいた玉。神の美しい御姿の形容。
○みつみつし―久米の枕詞。
○はしけやし―愛すべき。
○にひばり―常陸國新治郡。
○かゞなべて―日に日々竝べて。日を重ねて。

○さねさし―相模の枕詞。

さねさし相模の小野に　燃ゆる火の火中に立ちて　とひし君はも　（弟橘姫命）

四　祝詞

說話と歌謠とは、優劣の差こそあれ、どの民族でも大抵上代から持つてゐたが、わが國にはなほこの外に特殊な文學があつた。祝詞が卽ちそれである。そも〳〵わが國は太古から敬神崇祖を國是としてゐた。政治は神意のまゝに行はれ、祭祀「まつりごと」が、やがて政治であつた。そして祭祀の大切な儀禮として神前で奏せられるのが祝詞であつた。それは、言葉には言靈といつて、神秘的な靈力が宿つて居り、めでたい言葉を唱へれば吉事が生じ、不吉な言葉を唱へれば凶事が起る、そしてわが國は「言靈の幸はふ國」「言靈のたすくる國」といつて、言葉の靈力の特に著しい國であるから、美しい言葉をもつて、神德をたゝへ誠意を捧げれば、神意を和らげ神助を仰ぐことが出來るといふ信仰から發達したものである。從

つて祝詞は特に言葉を選擇した、美辭麗句を陳ねたもので、上代文學の中で最も文學的なものであつたであらう。そして文化が進歩し、政治が向上するにつれて、祝詞の内容もいよ〳〵發達して行つたことであらう。現在傳へられてゐる祝詞は、大體大和時代後期に整つたものと推定せられるから、なほ次章で再説することにしよう。

第二章　大和時代後期——文學記載時代

一　概説

建國以來、歷朝の御稜威により、日本文化は次第に國内に充實して、やがて更に勝れた文化を海外に求めることとなつた。應神天皇の御代（九四五）に初めて漢籍が輸入せられ、欽明天皇の御代（一二二）にまた新しく

佛典が輸入せられて以來、支那・印度の文化は大河を決したやうに滔々としてわが國に流入し、わが文運は急速の進歩を遂げた。即ち推古天皇の御代（一二六四）には憲法十七條を制定せられ、孝德天皇の御代（一三〇六）には大化の改新となり、元明天皇の和銅三年（一三七〇）には奈良奠都となつた。政治制度の進展とともに美術工藝等も亦大に興隆した。大和時代後期に於ける文化の發展は誠にめざましいものであつた。この間に於ける文學界の狀勢を見れば、まづ何よりも漢文學の教養が重ぜられ、その作文・作詩に長じたものが次第に輩出した。夙く推古天皇の御代（一二八〇）にわが國最初の歷史として、天皇記・國記を編修せられ、弘文天皇以降の漢詩賦は、孝謙天皇の御代（一四一一）に集められて「懷風藻」と名づけた詩集さへ成るに至つた。しかし國民の思想感情は自國語を離れては到底十分にいひ表し得るものでない。漢文學の教養が深まるや、漢字を借りて國語を寫す方法を工夫し、國語

二

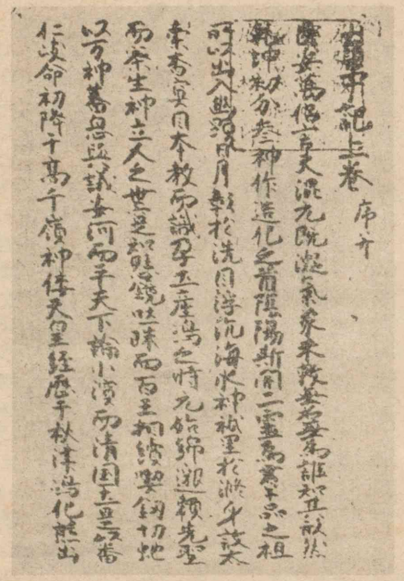
をもつて歴史を編修することとなつた。和銅五年（一三七二）に編まれた「古事記」が卽ちそれである。純粹感情を表現する爲に、國語を離れることの出來ない歌謠は、この借字の法を得ていよ〳〵發達し、漢字を遊戯的に弄ぶやうにさへなつた。かうして大いに發展して來た和歌を集成したのが「萬葉集」である。

かうして、この時代の人々は漢文學を正式の文學と考へながら、自分のほんたうの思想感情を表現したいといふ痛切な欲求から、國文學を生み出し、これを漢字に記載したのであつた。從つてこの時代の國文學は、外來文學の間に育てられながら、國民の眞實な精神生活を表現してゐるのである。

記紀・風土記

古事記　現存する最古の記載文學は「古事記」三卷である。これより先、天武天皇が修史の御志を抱かせられ、稗田阿禮をして、皇室を

はじめ諸氏族の傳承した神話・傳說等を誦み習はしめ給うたが、未だ成書とならなかつたのを、元明天皇が太安萬侶に詔して、阿禮の傳へたところを筆錄せしめられ、和銅五年（一三七二）成つて獻つたものである。當時既に漢字の使用に習熟してゐたとはいへ、これを以て長い說話を記すことは容易でなかつた。苦心の末、音訓を交へ用ひた新體の文章を創始したのであるが、特に古語・古意の保存に意を注いだのは、大きな功績である。上卷には神代史を、中卷には神武天皇から應神天皇まで、下卷には仁德天皇から推古天皇の御代までを記してゐる。



古事記（眞福寺本）

○訓―「よるひる」を「晝夜」と書くの類。
○音―「與」と書いて「よ」と讀ませる類。借字。
○命以―仰せになつて。

上古の時、言意竝に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於ては卽ち難し。已に訓に因りて述ぶれば、詞心に逮ばず。全く音を以て連ぬれば、事の趣更に長し。是を以て、今一句の中に音訓を交へ用ひ、或は一事の內、全く訓を以て錄せり。（古事記序）

於是亦高木の大神之命以、覺白之、天神御子、自此於奧方莫使入幸荒神甚多、今自天遣八咫烏、故八咫烏引道、從其立後、應幸行。（古事記中卷）

日本書紀　古事記成功の後、八年、元正天皇の養老四年（一三八〇）に舍人親王が總裁となられ、太安萬侶等多くの學者が集まつて撰修したもので、三十卷、持統天皇の御代まで記してゐる。これは支那史籍に對抗する意圖から、歌謠の外は、殆ど漢文で書かれたので、文章は莊重であるが、文學的價値は「古事記」よりも劣つてゐる。

風土記　元明天皇の和銅六年（一三七三）卽ち「古事記」の撰進せられた翌年、畿內七道諸國に詔して、その國々の地誌を編ましめられ、諸國から成るに從つて奉つたもので、殆ど全國すべてから集まつたが、現存の古風土記は、出雲・常陸・播磨・肥前・豐後の五箇國のものに過ぎない。い

○新嘗―新穀を初めて食ふこと。
○諱忌―身を淸淨にして、外界と交はりを絕ち謹愼すること。
○天地のむた―天地と共に。
○代のことごと―いつまでも限りなく。

づれもその地方の山川・物產・傳說等を記したもので、その傳說には鄕土的でしかも國家意識の旺んなものが多い。

古老の曰へらく、昔祖の神の尊、諸神の處に巡り行でましし、駿河の國福慈の岳に到り給ひて、卒に日の暮に遇ひ、寓宿を請ひ欲ぎ給ひき。此の時、福慈の神、答へて申しけらく、「新粟の新嘗して、家內諱忌せり、今日の間は冀はくは許し堪へじ」と申しき。ここに祖の神の尊恨み泣きて罵告り給ひけらく、「汝が親を何ぞは宿さまく欲りせぬ。汝が居める山は、生涯の極、冬も夏も雪霜ふり、冷寒重なり、人民も登らず、飮食も奠る人無けむ」と宣り給ひき。更に筑波の岳に登りて、亦容止を請ひ給ひき。此の時、筑波の神答へて申しけらく、「今夜は新粟嘗すれども、敢へて尊旨に違ひ奉らじ」と申しき。ここに飮食を設け、敬拜み祇承へ奉りき。こゝに祖の神の尊歡び謂ひ給はく、

愛しきかも我が胤　魏きかも神宮　天地のむた月日のむた　人民集ひ賀ぎ　飮食豐かに　代のことごと　日に日に彌榮えむ　千秋萬歲に　遊樂窮らじ

と宣り給ひき。是を以ちて、福慈の岳は常に雪ふりて、登臨ることを得ず。其の筑波の岳は、往き集ひ歌ひ舞ひ、飮み食ひすること、今に至るまで絕えざるなり。（常陸國風土記）

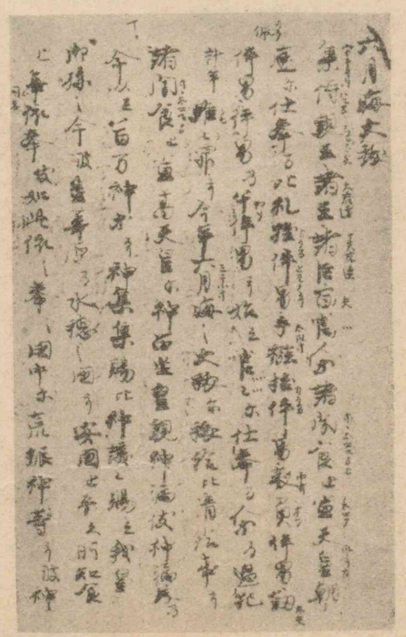
三　祝詞・宣命

○外一篇―藤原頼長の「台記別記」に收む

祝詞　現存する祝詞は、醍醐天皇の延長五年（一五八七）撰進の「延喜式」に收められた二十六篇及び外一篇で、平安時代に入つてから筆錄せられたのであるが、その源は、前章に述べたやうに遠く太古に溯り、今日傳へられてゐるやうな形は、大體大和時代後期に整つたものであらう。

祝詞のうち、大殿祭・御門祭・鎭火祭は天皇の玉體・宮廷の安穩長久を祈願するもの、祈年祭・月次祭は五穀の豐饒を祈るもの、廣瀨大忌祭・龍田風の神祭は風水害のないやうに祈るもの、大嘗祭は今年の豐作を感謝するもの、大祓詞は罪禍の消滅を願ひ、遷却崇神の祝詞は災禍の退散を祈るもので、これらの內容は(一)皇室の御安泰を祈るもの、(二)農業の繁榮を祈るもの、(三)罪禍の消滅を祈るものと、凡そ三種に大別せられる。そのいづれにしても、最初にわが國體の淵源を說き、これに參與した神の功業を讚へ、かくの如き功業の多い力の大きい神に、多くの食物布帛を奉るのであるから、我々の願ひは必ず叶へられるであらうと結ぶのである。

そしてこの祈願を達するのに、心身の淸淨を條件としてゐるのは、わが國民の先天的な性情から出たものであらう。



祝　詞（九條家本）

○比禮掛伴男―頸に裝飾の領布をかけて陪膳に奉仕する采女の長。
○手繦掛伴男―たすきをかけて御膳に奉仕する膳夫の長。
○靫負伴男―背に靫を負ひ腰に劔を佩く武官の長。

集侍親王・諸王・諸臣・百官人等、諸聞食止宣。天皇朝廷爾仕奉留比禮掛伴男・手繦掛伴男・靫負伴男・劔佩伴男・伴男乃八十伴男乎始氐官々爾仕奉留人等乃過犯家牟雜雜罪乎、今年六月晦之大祓爾祓給比淸給事乎、諸聞食止宣。（中略）

かく宣らば、天つ神は天の磐門を押披きて、天の八重雲を稜威の千別きに千別きて聞

○伴男乃八十伴男―上に擧げた以外のすべての氏族の長。
○いほり―立ちこめた雲霧。
○科戸の風―風の神。級長津彦命、級長戸邊命の吹かせる風。
○大津邊―大きな港。
○燒鎌―火で燒いて錬へた鎌。
○さくなだり―眞下に向つて。
○潮の八百道―幾多の潮流の合流する所。
○津開速姫―迅速に祓ひ清める神。
○かゞ呑み―がぶ〳〵と呑む。

しめさむ。國つ神は高山の末、短山の末に上りまして、高山のいほり、短山のいほりをかき別けて聞しめさむ。かく聞しめしてば、皇御孫之命の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝の御霧夕の御霧を、朝風夕風の吹き拂ふことの如く、大津邊に居る大船を、舳解き放ち、艫解き放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が本を燒鎌の敏鎌もちて打掃ふことの如く、遺る罪はあらじと祓へ給ひ清め給ふことを、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀨にます瀨織津姫といふ神大海原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒潮の潮の八百道の、八潮道の潮の八百會にます速開津姫といふ神、持ちかゞ呑みてむ。かくかゞ呑みてば、氣吹門にます氣吹戸主といふ神、根の國、底の國に氣吹き放ちてむ。（大祓詞）

宣命　祝詞とほゞ同じ形式のもので、天皇が臣民に宣り給ふ御言葉に、宣命があり、「續日本紀」に收められた文武天皇即位の宣命を初め六十二篇が現存してゐる。その內容は、祝詞に比べて、著しく現實性をおび、時勢の進運に伴うて、佛教や儒教の外來思想をもとり入れられてあるが、その中に、畏くも御身を謙抑し給ひ、國運の隆昌と臣民の安穩とを思念し給うた御仁慈の程を拜察し奉ることが出來る。

遠皇祖御世乎始而、天皇御世御世、天豆日嗣止高御座爾坐而、此食國天下乎撫賜比慈賜事者、辭立不在、人祖乃意能賀弱兒乎養治事乃如久治賜比慈賜來業止奈母、隨神所念行須。是以、先豆先豆天下公民之上乎慈賜久止詔天皇大命乎、衆聞食止詔。（元明天皇即位の宣命）

○高御座―天皇の玉座。
○食國―天皇の治め給ふ國。
○辭立―特別な事をする。
○治―育てる。
◎祝詞・宣命の如く、送假名を小文字で書く體を宣命體といふ。

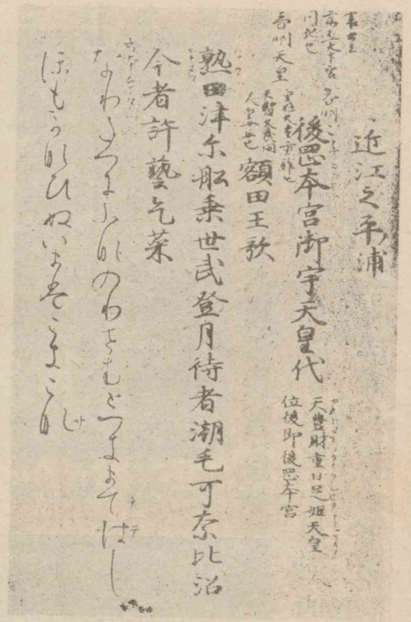
萬葉集

撰集　これまで述べて來た「古事記」「日本書紀」等は、前代の口誦文學を整へて文字に記載したものに外ならないが、當代の輝かしい文化的教養を受けて、新しい生活感情を表現したものに和歌があり、これを集成したものが「萬葉集」である。「萬葉集」は二十卷、歌の總數四千五百餘首、作者はすべて五百六十餘人、最も古いのは仁德天皇の皇后磐媛の御歌であるが、大部分は持統天皇の御代以降のもので、殊に聖武天皇頃のものが多い。歌集の成立時代は、集中最後の

○戯訓―「山上復有山」と書いて、「いづ」「田」と讀ませる類。

作である天平寶字三年の頃であらうが、撰者は明らかでない。恐らく集中最も多數の歌を收めてゐる大伴家持が、從來編まれてゐた幾つかの歌集を本として集成を企て、未だ完成しないで終つたものであらう。

内容　この集の作者は、上は天皇から下は防人・農民・白水郎・乞食者に至るまで、あらゆる階級の人々を網羅してゐるので、その歌風も頗る多種多樣であるが、記紀の歌謠に比べて著しく變つてゐることは、口に誦へて耳に樂しむ謠ひ物から、文字に記して眼を喜ばせる讀み歌に移つて來たことで、漢字を音符文字として音讀・訓讀する所謂萬葉假字の用法が自由になつてゐるばかりでなく、屢機智を弄した戯訓をも試みてゐる。　讀み歌となつたのであるから、五七の音律が殆ど整備して居り、修辭としては、枕詞・譬喩などが愈巧妙となり、疊句は内容のある對句に發達し、全體の聲調も甚だ流麗となつてゐる。　その思想は、さすがに外來文化の影響を受けて、その人生觀や社會觀に相當複雜したものも見られるが、大體に於て古代の朴直簡素を失はず、現世的樂天的で、尊皇敬神の至情、父子夫婦親愛の純情、自然景物讃美の感情を端的に表現して、讀者に強い感銘を與へてゐる。



萬葉集（元暦校本）

歌人　數多い歌人の中、まづ最初に擧げるべきのは、女流の額田王で、萬葉初期、天智天皇・天武天皇兩朝の御方であるが、その御歌は措辭・思想ともに、記紀のものに比べて著しい進歩である。　萬葉盛期には、歌聖雙璧と稱へられた柿本人麻呂・山部赤人があり、持統天皇・文

武天皇兩朝の人麻呂は頌賀・別離・哀傷等、抒情の長歌に勝れ、人麻呂よりやゝ後の赤人は、これに對して敍景の短歌に長じてゐた。同じ頃の山上憶良・大伴旅人は共に漢文學の影響を受けた歌人で、憶良は貧窮・疾病等人間生活の苦惱を長歌に綴つて居り、旅人はこれに反して、明朗恬淡な情趣を謠つてゐる。やゝ下つて、高橋蟲麻呂は古來の傳說を題材として、豐麗な歌を詠んだ。末期の歌人家持は旅人の子で、初め感傷的な歌を詠んだが、やがて人麻呂・憶良の風を學んで別に一家を成し、力强い男性的な作を殘してゐる。旅人の妹大伴坂上郎女も勝れた歌人であつた。

山部赤人（藤原信實筆）

冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山

冬木成　春去來者　不喧有之　鳥毛來鳴奴　不開有之　花毛佐家禮杼

○春さり―春。

○山をしみ―山が茂つてゐて。

○そこしうらめし―それが情趣が深い。

○玉襷―畝火の枕詞。

○橿原の日知の御代―神武天皇。

○天にみつ―倭の枕詞。

○石走る―淡海の枕詞。

○天皇―天智天皇

○百磯城の―大宮の枕詞。

○大わた―大海。

をしみ入りても取らず　草深み手折りても見ず　秋山の木葉を見では　黃葉をば

山乎茂　入而毛不取　草深　執手母不見　秋山乃　木葉乎見而者　黃葉乎婆

取りてぞしのぶ　青きをば置きてぞ歎く　そこしうらめし　秋山われは　（額田王）

取而曾思奴布　青乎者　置而曾歎久　曾許之恨之　秋山吾者

玉襷　畝火の山の　橿原の日知の御代ゆ　生れましし神のことごと　樛の木のいやつぎつぎに　天の下知ろしめししを　天にみつ倭を置きて　あをによし奈良山を越え　いかさまにおもほしめせか　天離る夷にはあれど　石走る淡海の國の　ささなみの大津の宮に　天の下知ろしめしけむ　天皇の神の尊の　大宮は此處と聞けども　大殿は此處といへども　春草の茂く生ひたる　霞立つ春日の霧れる　百磯城の大宮處　見ればかなしも

柿本人麻呂（土佐光芳筆）

反歌

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

ささなみの志賀の大わた淀むとも昔の人にまたも逢はめやも　（柿本人麻呂）

○潟を無み―干潟が無くなつて。
○罷らむ―酒宴から退出しよう。
○象の小河―大和國芳野。
○ゆなゆなは―遂には。

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける　（山部赤人）

いにしへの舊き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり　（同）

和歌の浦に潮滿ち來れば潟を無み葦邊をさして鶴鳴き渡る　（同）

憶良らは今は罷らむ子哭くらむその子の母も吾を待つらむぞ　（山上憶良）

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも　（同）

七やも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして　（同）

昔見し象の小河を今見ればいよよ清けくなりにけるかも　（大伴旅人）

わが苑に梅の花散る久方の天より雪の流れ來るかも　（同）

春の日の霞める時に　住吉の岸に出でゐて　釣舟のとをらふ見れば　古への事ぞ念ほゆる　水江の浦島兒が　堅魚釣り鯛釣り矜り　七日まで家にも來ずて（中略）住吉に還り來りて　家見れど家も見かねて　里見れど里も見かねて　あやしとそこに念はく　家ゆ出でて三歳の程に　墻も無く家滅せめやと　この筥を開きて見てば　舊の如家はあらむと　玉篋少し開くに　白雲の箱より出でて　常世方に棚引きぬれば　立ち走り叫び袖振り　反側び足ずりしつつ　忽ちに情消失せぬ　若かりし膚も皺みぬ　黑かりし髮も白けぬ　ゆなゆなは氣さへ絶えて　後つひに壽死にける　水江の浦島子が　家地見ゆ　（高橋蟲麻呂）

海行かば水づく屍　山行かば草むす屍　大君の邊にこそ死なめ　顧みはせじ　（長歌の一節）

劔刀いよよ研くべし古へゆ清けく負ひて來にしその名ぞ　（大伴家持）

丈夫は名をし立つべし後の代に聞き繼ぐ人も語り續ぐがね　（同）

山の端のささらえ壯子天の原門渡る光見らくしよしも　（同）

○古へゆ―昔から。大伴氏は神代から武を以て仕へた家柄である。
○ささらえ壯子―月の異名。

第三章　平安時代初期――國字文學展開時代

一　概說

桓武天皇の延曆十三（一四五四）年山城國平安京に都を奠められて、これより百花繚亂の平安時代が生まれ出ることとなつた。もと、わが國の都は御代毎に改められてゐたのが、奈良に廣大な恆久的な都を奠められたのは、外來文化の輸入による文運の急速な進展に促された結果であつた。しかも文運の進歩は愈著しく、爾來僅か七十年

にして、早くも狹小の不便に迫られ、こゝに新しく、更に大規模の都を造營せられることとなつたのである。從つて平安奠都當初に於ける海外文化の將來は、奈良時代よりもなほ一層盛んであつた。官立の大學、私立の學院、皆爭つて漢文學を講述し、嵯峨天皇の御代に至つて、ほゞその絕頂に達した。「文選」「白紙文集」「蒙求」などは、最も愛讀せられた書で、その刺激を受けて、漢詩文に堪能な作者が輩出した。嵯峨天皇の御代には小野岑守撰進の「凌雲集」、藤原冬嗣等撰進の「文華秀麗集」、淳和天皇の御代には良岑安世等撰進の「經國集」があり、一家の集にも僧空海の「性靈集」、菅原道眞の「菅家文草」「菅家後集」などが出來た。しかし外來文化にも自ら限度がある。凡そ攝るべきほどのものは攝り盡されて、醍醐天皇の御代、菅原道眞が遣唐使を辭退したのを劃期として、わが文化は進展の方向を轉換することとなつた。

漢文學全盛期に於けるわが漢詩文は、頗る巧緻で、支那大家の作を凌駕するものも少くなかつたが、漢詩文は畢竟外國文學である。國語を寫すに適當な文字の欲求は常に絕えず、色々と工夫せられて、片假名・平假名を發明するに至つた。國語を必須の條件とする和歌は簡便な假名を得て大いに流行し、やがて勅撰和歌集を撰修せられることとなつた。內容の多い散文も亦假名に助けられて、次第に發達し、歌物語・物語・日記などが、和歌を中心として作り出された。わが國字文學はこゝに和歌を中心として第一期の展開を見るのである。

二

謠ひ物

歌謠は原則として謠はれるべきものであらうが、わが歌謠の本流である和歌は、夙く謠ふものでなく、讀むものになつてしまつた。この傾向は「萬葉集」に於て既に著しくあらはれ、平安時代に入つて

からは殆ど謠はれてゐない。たゞこの間にあつて神樂・催馬樂といふ特殊な謠ひ物が存在した。

神樂　神前に奏せられた古い謠ひ物で、「萬葉集」にも「神樂聲」と書いて「さゝなみ」と戯訓してゐるが、歌詞の整美したのは、平安初期であらう。謠ひ物ではあるが、嚴肅な神前で奏せられた爲に、古典的儀式化して、自由な形を失ひ、大抵正しい三十一文字の短歌形をとつてゐる。たゞその初句又は末句を繰返してゐるのが、普通の短歌とちがふところである。

深山には深山には霰ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり色づきにけり（庭燎）

榊葉に木綿とり垂でて誰が世にか神の御前にいはひそめけむいはひそめけむ（榊葉）

○木綿―楮の繊維で織つた布。神に供へる垂（しで）とする。

催馬樂　都人士の間にもてはやされた民謠を外來樂に合はせて謠つたもので、神樂や遊宴の餘興として行はれたので、神樂とは反對に、表現が自由で、内容も多樣であつた。

あなたふとあなたふと今日の尊さやいにしへもハレいにしへもかくやありけむヤ今日の尊さ　アハレソコヨシヤ今日の尊さ（安名尊）

西寺の老鼠若鼠御裳喙んづ袈裟つんづ法師に申さむ師に申せ法師に申さむ師に申せ（老鼠）

三　和歌の進展

初期の和歌　さてわが歌謠の本流和歌の狀勢を見れば、この頃三つの傾向があつた。その一は、男子の文學は漢詩文であると信じながら、燃ゆるが如き眞情は和歌で表現するより外はないといふ抑へがたい心持から叫び出した、形式よりも内容を主としたもので、在原業平がその著例である。その二は、男子にとつて和歌は文學の餘技であるといふ輕い心持から詠み出した、内容よりも修辭の技巧を凝らしたもので、僧正遍昭がその例である。その三は、和歌は女子にとつて唯一の文學であるといふ遣瀨ない心持から、心魂

◎古今集序で特にその歌を批評せられてゐる在原業平・僧正遍昭・小野小町・大伴黒主・喜撰法師・文屋康秀を六歌仙といふ。

○忘れては―惟喬親王の幽居を訪ひ奉つた時の歌

○天つ風―五節の舞を詠んだ歌。

をうち込んで、内容・形式二つながらの整美を期したもので、小野小町がその代表者であつた。

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは　（在原業平）

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　（同）

蓮葉の濁りに染まぬ心もて何かは露を玉とあざむく　（僧正遍昭）

天つ風雲の通路吹きとぢよをとめの姿しばしとゞめむ　（同）

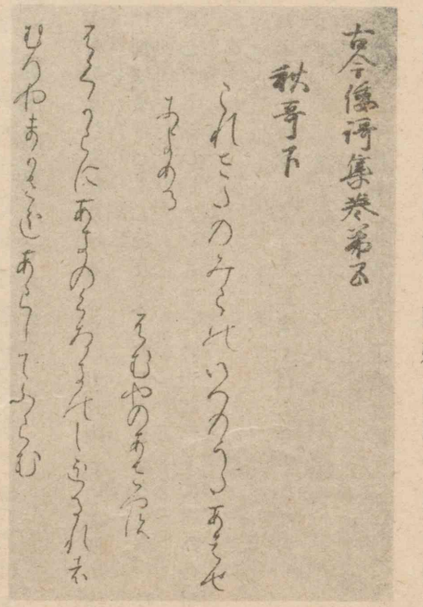
思ひつゝ寢ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを　（小野小町）

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける　（同）

古今集の勅撰　漢文學の全盛期も既に去つて、國文學のこれより大いに勃興しようとする醍醐天皇の御代に、これまでの漢詩の勅撰集に對して、和歌の勅撰集が撰ばれた。延喜五年（一五六五）撰進の「古今和歌集」二十卷がそれである。撰者は紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人。これを「萬葉集」に比べると、この集の歌體は殆ど短歌のみとなり、格調も彼の勁健な五七調が衰へて暢達な七五調となり、

○袖ひぢて―袖がひどく濡れて。
○むすびし―すくつた。
○あやなし―わけがわからない。

修辭は愈巧緻纖細となつた。大體に於て醇雅典麗であるが、やゝもすれば感情を理智的に反省して、純朴な詩美を傷つける嫌ひがあつた。當時の歌人では、撰者の貫之・躬恒、女流の伊勢が最も勝れてゐた。



古今和歌集（紀貫之筆）

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ　（紀貫之）

櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける　（同）

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るゝ　（凡河内躬恒）

千鳥鳴く濱の眞砂をふみ分けて行く旅人はあはれ誰ぞも　（同）

見る人もなき山里の櫻花ほかの散りなむ後に咲かまし　（伊勢）

皐月來ば鳴きも舊りなむほととぎすまだしきほどの聲を聞かばや　（同）

四　散文學の展開

古今集の勅撰と相前後して、次のやうな各種の散文學が創作せられた。

伊勢物語　在原業平の和歌を主として、その逸話を記した百二十餘篇の短篇集で、このやうな和歌傳説を記したものを歌物語といふ。

「伊勢物語」は文章が簡潔で、餘情に富んでゐる。

昔、男ありけり。身は賤しながら母なむ宮なりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに師走ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

かの子、いたうう泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため

○かなしうし―かはいがり。

○さらぬ別れ―避け難い別れ。死別。

竹取物語　竹取の翁が竹を切ると、中に光り輝く女兒がゐたので、かぐや姫と名づけて寵愛するうちに、成長するに從つて、愈美しくなつたが、姫は實は月界の仙女で、或年の八月十五夜遂に昇天するといふ、童話的性質をおびた滑稽な人情小説で、文章は素朴でしかも優雅な趣がある。

今は昔竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、よろづの事につかひけり。名をば讃岐造麻呂となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一節ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば三寸ばかりなる人、いと美しうてゐたり。

○もと光る―幹の光る。

古今集序　貫之の作。和歌の偉大な文學的價値を説き、先代の勝れた歌人を批評したもので、わが文學論・隨筆の祖。後世に與へた影響が甚だ大きい。

倭歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを見るもの聞くものにつけて、いひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり。

土佐日記　紀貫之が承平四年（一九四）土佐守の任を終へて歸洛する舟路の旅日記で、日記文學の最初の作品である。文章は輕妙洒脫であるが、殊更に女の筆のやうに裝うてゐるところに、當時の文學界の狀勢が察せられよう。

男もすといふ日記といふものを、女もして心みんとてするなり。それの年しはすの二十日あまり一日の日のいぬの時にかどでする。そのよしいささか物にかきつく。

○日記―當時男子の日記はすべて漢文であつた。

散文系の國文學は、以上擧げた四種類、卽ち和歌傳說の「伊勢物語」、假空小說の「竹取物語」、思想的論文の「古今集序」、實際的記錄の「土佐日記」が祖先となつて、やがて次期の燦爛たる散文學全盛時代を現出するのである。

第四章　平安時代盛期――散文學興隆時代

一　概說

外來文化は既に前期に於て飽和狀態に達した。この勝れた文化を如何に處置するかが、この期に課せられた時代的使命であつた。外來文化を處置するのに、二つの方法があり得る。その一は、外國文化を生のまゝ全國に普及することであり、その二は、普及するに先だつて、教養のある人々がこれをよく攝取消化して日本化することである。そして事實は後者の道を擇ぶこととなり、平安貴族の藤原氏一族が主としてその任に當ることとなつた。これは必ずしも藤原氏一族がこの重大な使命を認識してゐたのではないが、窮まりなく進展して行く國家の、或時代の擔當者は、その意識す

るとしないとに拘らず、必ず時代的使命を果して、次の時代へのよき段階を作つて行くものである。

さて、この期に於ける平安京の狀勢は、藤原氏一族のみ榮えて、他の氏族にはよくこれに對抗し得るものがなかつた。藤原氏の名門であれば、高い地位を保ち得たのであるが、同門相競うて外戚の榮を誇らんが爲に、特にその女子の教養に意を用ひ、文學に長じた女流を求めて、わが女に近侍せしめた。文才に秀れた女流は乞はれてその任に當り、各その天分を發揮した。即ちそれらの女流作家は、過去數百年に亘つて將來した東洋文化を日本化し、醇化した平安貴族の文化生活を、女性的な纖細優美な情趣を以て觀照し、既に前期に於て展開し初めてゐた各種の國字「文」學を更に自由に發展せしめて、純日本的な「もののあはれ」の精神を表現し、かくして百花燎亂の王朝文學を創造したのである。

二　和歌の沈滯

後撰集拾遺集　勅撰和歌集は、「古今集」成功の後四十七年、村上天皇の天暦五年（一六一）に、源順・大中臣能宣・清原元輔・紀時文・坂上望城の所謂梨壺五人によつて「後撰集」が撰進せられ、その後また約五十年して、「拾遺集」が撰ばれ、「古今集」と共に、三代集と稱して、後世歌人の尊重するところとなつたが、この二集の歌風は、「古今集」の型をそのまゝ踏襲して、清新の氣の味ふべきものが少い。當代の歌人には、男子に源順・藤原公任・曾禰好忠・能因法師等があり、中にも好忠は斬新な歌を詠んだが、秀れたのは、紫式部・赤染衞門・和泉式部等の女流歌人で、殊に和泉式部は業平の情熱と小町の纖巧とを兼ね備へた、當代第一の歌人であつた。

老いぬれば同じ言こそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ　（源順）

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ　（藤原公任）

○瀧の音は―大覺寺の古瀧を詠んだ歌

鳴けや鳴け蓬が杣のきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞかなしき　（曾根好忠）
心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春のけしきを　（能因法師）
若竹のおひゆく末を祈るかなこの世をうしと思ふものから　（紫式部）
朝顔のとくゆかしきに起きたればわれよりさきに露はれにけり　（赤染衛門）
春霞立つやおそきと山川の岩間をくぐる音聞ゆなり　（和泉式部）
夕暮はものぞかなしき鐘の音を明日も聞くべき身とし知らねば　（同）

歌論　古今集序にその端を發した文學論は、その後、歌合の流行と支那詩學の影響とによつて、歌論の發達を促し、この期に於て藤原公任が「新撰髄腦」を著はした。

物語の進展

平安盛期文學の首座を占める物語小説には、まづ「伊勢物語」系統のものに「大和物語」があり、「竹取物語」系統のものに「宇津保物語」「落窪物語」がある（この外にも幾つか物語があつたが、傳はらない）。作者は明らかでないが「大和物語」は村上天皇の頃「宇津保物語」「落窪物語」は圓融・

花山兩天皇の頃、いづれも男子の手で作られたものであらう。

大和物語　「伊勢物語」が業平傳説で一貫してゐるのに對し、「大和物語」は樣々の歌物語を集めたもので、説話文學として一歩進展した作品である。

宇津保物語　貴宮といふ美しい女性を中心とした二十帖の物語で、傳奇的色彩の濃いことは「竹取物語」と同樣であるが、長篇の小説的構想に成功して、數段の進歩を示してゐる。

落窪物語　幼時母を失つた落窪君といふ女性を主人公とした家庭小説で、これには、もはや傳奇的な趣はなく、よく人情の機微を描いて、寫實小説の體を整へてゐる。

源氏物語

紫式部　宇津保・落窪の後を受けた「源氏物語」は卷數五十四、内容は尤大、構造は複雜、而も描寫は極めて自然で、かくの如き堂々たる寫實

小説がこの古い時代に出來たのは、わが國の最も大きな誇りであらう。作者紫式部は藤原爲時の女で、幼少の時から甚だ聰明であつた。初め藤原宣孝に嫁して、大貳三位・辨の局の二女を擧げたが、夫は長保三年（一六六一）病歿したので、その後、道長の女で一條天皇の中宮の彰子に仕へた。「源氏物語」はその寡居時代に書き初めたものである。

物語の構造　源氏物語は自ら前後の二編に分れ、前編では花やかな光源氏を、後編ではもの淋しい薫大將を主人公として、前後四百人近くの人物を活躍せしめ、それらの人々の性格をそれ〴〵鮮やかに描き出して、照應の妙を極め、事理を盡しては局面を展開させ、しかもその間に纖細な情趣を喜ぶ當代の風尚を醇化した、作者の女性觀・人生觀・社會觀を巧みに織り込んでゐる。

紫式部（集古十種）

清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりにやあらんと見えて、白き衣、山吹などのなえたる着て走り來たる女子、あまた見えつる子どもに似るべくもあらず、いみじう生ひさき見えて、美しげなるかたちなり。髪は扇を廣げたるやうにゆらゆらとして、顏はいと赤くすりなして立てり。「何ごとぞや。童べと腹立ち給へるか」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。「雀の子を犬きがにがしつる。伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口をしと思へり。この居たる大人「例の心なしの、かゝるわざをしてさいなまるゝこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やう〳〵なりつるものを。烏などもこそ見つくれ」とて立ちて行く。髪ゆるらかにいと長く、めやすき人なり。少納言の乳母とぞ人いふめるは、この子のうしろ見なるべし。尼君「いであな幼や。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく今日明日になりぬる命をば何とも思したらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得ることぞと常に聞ゆるを、心うく」とて、「こちや」といへば、ついゐたり。つらつきいとらうたげにて、肩のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじう美し。（若紫の卷）

○おぼえたる―似てゐる。
○犬き―犬君。女童の名。
○さいなまる―叱られる。
○いふかひなう―頑是がない。

五　日記・隨筆

公私の實際生活を記錄する男子の日記は、漢文體で事務的に記載したものばかりで、嘗て紀貫之が女性の筆に托して文學的表現を試みたが、その後これに倣ふものは出なかつた。「土佐日記」系統の日記文學はすべて女流の作品ばかりである。而してそれら女流の作品は、所謂日記とは趣を異にしてゐて、年月を距てた後、往事を回想して所懷を述べた、思出記又は自叙傳の如きもので、文學的色彩が甚だ濃厚である。

蜻蛉日記　攝政兼家の妻、右大將道綱の母が天曆八年（一六一四）から天延二年（一六三四）まで二十一年間の思出を記したもので、妻・母の心づかひをこまごまと記してゐる。

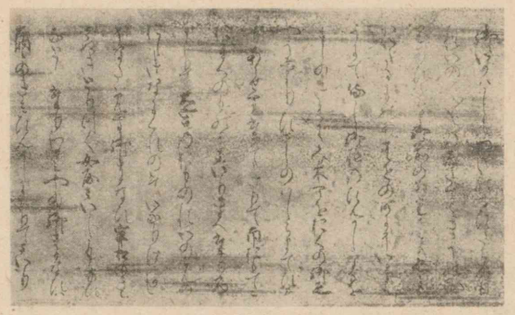
和泉式部日記　和泉式部が長保五年（一六六三）・同六年の身邊を述べたもので作者を第三人稱にして、その生活を客觀的に描寫してゐる。

紫式部日記　寛弘五年（一六六八）から同七年までの記事で、作者紫式部自身の

○土御門殿―道長の第。

○御前―中宮彰子（上東門院）。

生活よりも周圍の觀察・感想を叙べてゐる方が多い。



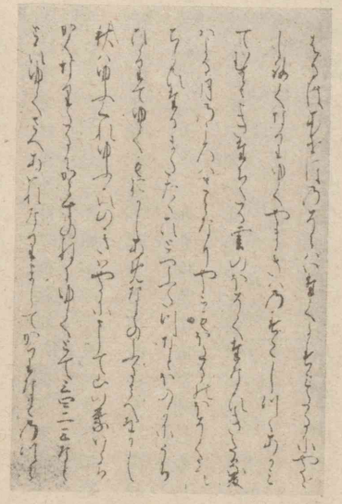
紫式部日記

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿のありさま、いはん方なくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつゝ、大かたの空も艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々あはれまさりけり。やう〳〵涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水の音なひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞しめしつつ、惱しうおはしますべかんめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。（紫式部日記）

さて、思想的散文は「古今集序」の直系として、歌論の發展を見たが、それは和歌といふ一部門に局限せられてゐる。記錄的散文は「土佐日記」の系統を引いて、女流日記文學に展開したが、これも個人の實際的起居の叙述であるから、平板を免れない。こゝに於て、自己の生活體驗・事象觀察・

世相批判を、卽ち自己の行動と思想とを斷片的に折に觸れ時に隨つて書き記す事を考案した。隨筆が卽ちそれで「枕草子」はこの最初の秀れた作品である。

枕草子　「枕草子」の作者清少納言は清原深養父の孫、元輔の女で、文學の家に人と成つた。長じて後、道隆の女で一條天皇の皇后の定子に仕へ、紫式部とその才華を雙び稱せられた。「枕草子」は長短合せて三百段餘の文から成り、種々雜多の題材に對して、鋭敏な觀察・警拔な着想・冷靜な批判をもつて、縱橫に筆を走らせてゐる。これを「源氏物語」に比べると、彼は溫和な態度で人に同感せしめ、此は超凡の才氣を以て人を驚歎せしめてゐる。



枕草子（前田本）

○うつくしき―かはいい。
○へにつけて―足緒をつけて。
○尼にそぎたる―かぶろに髪を切つた。

うつくしきもの。瓜に描きたる乳兒の顏。雀の子の鼠鳴するに躍りくる。又へにつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむる、いとらうたし　三つばかりなる乳兒の、急ぎて這ひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびに捉へて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたる乳兒の、目に髪のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。

第五章　平安時代末期――文學傾向轉換時代

一　概說

平安貴族、藤原氏の榮華は、道長執政時代を極盛として萬壽四年（一六八七）その薨去と共に、次第に衰退して行つた。まづ後三條天皇は親政の制を施き、記錄所を置いて、莊園與奪の權を朝廷に收め給うた。次いで白河法皇は院政の制を創めて、藤原氏攝關の權勢を抑へ給うた。これまで藤原氏の頤使に甘んじてゐた源平の武士は、院御所

に伺候して、漸く藤原氏に拮抗する勢ひを示して來た。やがて保元・平治を經て、平清盛が太政大臣に上るや、平安貴族は武門と全くその地位を代へるに至つたのである。

平家貴族は衰退の一路を辿つたが、それは徐々に行はれたのであつて、急激な顚覆に遭つたのではない。從つて彼等の生活の徹底的な改善を求めることは出來なかつた。貴族の生活はすべて前代の引續きであつた。たゞ前代のやうな豐かな文化生活を營むことは許されない。生活內容が充實してゐないから、前代のやうな花やかな寫實文學を創作することが出來ない。過去を顧みて美しい夢を追ふの外はない。こゝに過去を記述する歷史傳說文學が生まれた。過去の夢は美しいが、現實は冷い。しかし現實を避けることは出來ない。こゝに華麗な世界を離れて、幽玄閑寂な詩境を見出すやうになつた。以上は貴族文學に於ける變化であるが、なほ他の一面、漸く社會的地位の向上して來た武士も、亦文學を求めるやうになり、彼等の間に雜藝が喜ばれ、謠ひ物が流行するやうになつた。

かうして貴族文學の爛熟した後のわが國文學は、更にその範圍を擴大し、その內容を深めて進んで行かうとする。その進行方面を示唆するのが、この期に於ける文學の大勢であつた。

二　物語・日記の低下

「源氏物語」は餘りにも傑れた大作で、後の人々はたゞこれを愛誦し、これに學ぶの外は無かつた。この期にも幾つかの物語が作られたが、勿論「源氏物語」に及ぶものは出なかつた。その中、

狹衣物語　紫式部の女大貳三位の作とも傳へられ、よく「源氏物語」に學んだ作で、その主人公狹衣大將は彼の薫大將に似てゐる。

濱松中納言物語　菅原孝標の女の作と傳へられ、主人公が支那に再

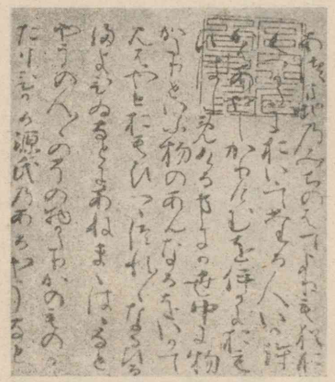
誕した父を訪ねるといふ趣向をとつてゐる。

堤中納言物語　作者不明、十篇の美しい短篇集である。

更級日記　菅原孝標の女が老後、思出を記したもので、當時の少女生活がよく描かれてゐる。

讃岐典侍日記　藤原顯綱の女の作で、堀河・鳥羽兩天皇に奉仕した頃の事を綿密に述べてゐる。

○奥つ方―上總國を指す。



更級日記（藤原定家筆）

東路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけんを、いかに思ひはじめける事にか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれ〴〵なる晝間・宵居などに、姉・繼母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところ〴〵語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど、わが思ふまゝに、そらにいかでか覺え語らん。いみじく心もとなきまゝに、等身に藥師佛をつくりて、手洗ひなどして、人間にみそかに入りつゝ、「京にとく上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ」と、身をすてて、額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らんとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。（更級日記）

○人間―他の人の居ない時。

三　史傳文學の興立

過去の夢を追ふこの時代を代表する散文學は、正統の史實を述べた歴史文學・歴史物語と、古來の傳說を記した傳說文學・說話集とで、前者に「榮華物語」「大鏡」「今鏡」があり、後者に「今昔物語集」がある。

榮華物語（板本挿繪）

榮華物語　宇多天皇から堀河天皇までの史實を編年體に記述したもので、「源氏物語」に倣つて、道長を彼の光源氏に擬へ、その榮華な一生を特に詳しく描寫

してゐる。作者は明らかでないが、堀河天皇の頃、女流の手に成つたものであらう。

かゝる御勢に添へて、入道せさせ給ひて後は、いとど勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜みまゐらす。今はこの御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪もやはらかに立ちて、この御堂の物を持て運ばせ、河も水澄みて、心よく浮かべ持て參ると見ゆ。なほなべてこの世のこととは見え給はず。

（疑の卷）

○かゝる御勢―道長の御勢。

○この御堂―今道長の造營してゐる法成寺。

大鏡　文德天皇から後一條天皇までの史實を紀傳體に記述したものので、これも道長を中心としてゐることは「榮華物語」と同樣であるが、彼がひたすら道長の讃美に終始してゐるのに對し、此は相當深刻な批判を下して居り、彼がその文體を力めて「源氏物語」に學んでゐるのに對し、此はその結構に新機軸を出してゐる。即ちその記述を作者の叙事文としないで、雲林院の菩提講に參りあはせた百餘歳の老翁の大宅世繼と夏山繁樹夫妻とが昔話をし、聽聞の青侍がこれに語を挿むといふ形をとつてゐるのであつて、後出の歴史物語は皆これに倣つてゐる。作者は明らかでないが、「榮華物語」より稍後れて、男子の手に成つたものであらう。

さいつ頃、雲林院の菩提講にまうで侍りしかば、例の人よりはこよなく年老いうたてげなる翁二人嫗と來あひて、同じ所にゐぬめり。あはれに同じやうなるもののさまかなと見侍りしに、これらうち笑ひ見交はしていふやう、「年頃昔の人に對面して、いかで世の中の見聞く事どもを聞えあはせん、このたゞ今の入道殿下の御有樣をも申しあはせばやと思ひしに、あはれに嬉しくも逢ひ申したるかな。今ぞ心やすく冥路もまかるべき。思しきことといはぬは、げにぞ腹ふくるゝ心地しける。かゝればこそ昔の人はものいはまほしくなれば、穴を掘りていひ入れ侍りけめとおぼえ侍る。かへすゞ〳〵嬉しくも對面したるかな」といふ。（序）

○入道殿下―道長。

今鏡　「大鏡」の後をうけて、後一條天皇から高倉天皇までの歴史を記したもので、形式も「大鏡」に倣つてゐる。

今昔物語集　撰者は宇治大納言源隆國と傳へられてゐるが、明らかでない。三十一卷、一千餘の説話から成るわが國最大の説話集で、初めの十卷に天竺・震旦の説話を記し、卷十一以下には本朝の説話を收めてゐる。佛教説話が多いが、本朝説話には、庶民生活に關するものも少からず交つて居り、文章も平易な和漢混淆の新體で、次代文學の先驅をなしてゐる。

今は昔、近江國栗太の郡に大きなる柞の樹生ひたりけり。其の圍り五百尋なり。然れば其の木の高さ、枝の差したる程を思ひ遣るべし。其の影朝には丹波の國に差し、夕には伊勢の國に差す。霹靂する時にも動かず、大風吹く時にも搖がず。しかる間、其の國の志賀・栗太・甲賀三郡の百姓、此の木の陰を覆ひて日當らざる故に、田畠を作り得る事無し。これに依つて、其の郡々の百姓等、天皇に此の由を奏す。天皇即ち掃守の宿禰等を遣はして、百姓の申すに隨つて、此の樹を伐倒してけり。然れば其の樹伐倒して後百姓田畠を作るに豐饒なる事を得たりけり。彼の奏したる百姓の子孫、今に其の郡にあり。昔はかゝる大きなる木なむありける。これ希有の事なりとなむ、語り傳へたるとや。

○霹靂―雷電の烈しい音。

四　和歌の革新

後拾遺・金葉・詞華集　當代の散文が懷古的な史傳文學を主流としたのに反し、和歌は實生活に卽して、革新の機運に向つた。まづ藤原通俊は「後拾遺集」を撰ぶに當つて、古今集踏襲の舊套を斥け、當代の風尙を重んじて、詩美の纖細と修辭の纖巧とを主張し、その後をうけた「金葉集」の撰者源俊頼は更に新奇に走り、藤原顯輔撰進の「詞華集」も亦革新の風に滿ちてゐた。たゞその餘弊は奇矯に陷り、正調を失ふところにあつた。

つれ〴〵と降る五月雨に日は暮れぬ軒の雫の音ばかりして　（藤原通俊）

世の中はうき身に添へる影なれや思ひすつれど離れざりけり　（源俊頼）

秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出る月の影のさやけさ　（藤原顯輔）

千載集　壽永二年（一八四三）後白河法皇の院宣によつて、藤原俊成が「千載集」の撰修に當るや、穩健な態度を以て時代の趨向を察し、前出三集革新の調を整へた。千載集に現れた特色の一は、叙景歌を和歌の本流

○後拾遺集の序に「世の人古を尊み今を卑みて、近世の歌に心をとめざるべけれど、なほ後世のために、この集を撰べるなり。」

とする從來の傾向を更に進めて、純客觀描寫を重んじたことであり、他の著しい一は、その趣味性に於て從來の典雅纖麗を去つて閑寂の詩境に就いたことで、俊成はこれを幽玄體と稱し、「心ほそし」と評してゐる。そしてこれこそ平安末期貴族の安住し得る境地であつた。この歌風を最もよく現してゐるのは俊成であるが、なほ異色のある歌人に、武門の出である西行法師があり、自然を友として氣品の高い歌を詠んだ。その家集を「山家集」といふ。

夕されば野邊の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里　（藤原俊成）

西行法師（應震畫）

住みわびて身を隱すべき山里にあまり隈なき夜半の月かな　（同）

はるかなる岩のはざまにひとりゐて人めつゝまで秋思はばや　（西行法師）

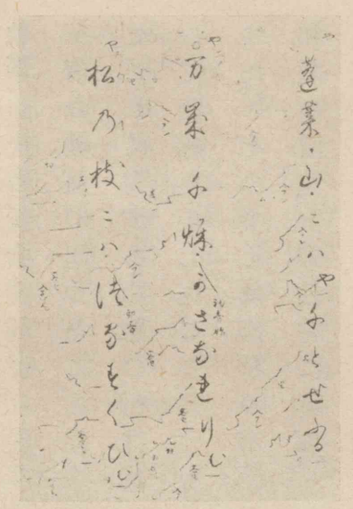
道のべの清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ　（同）

歌論　前代の「新撰髓腦」より展開した歌論は、この時代に入つて、和歌革新の機運の起つたこと、勅撰集の撰者が毎に唯一人であつたのでこれに對する論難の行はれたこと、文學と實生活との關係に對して疑惑を生じたこと、凡そ上のやうな理由によつて愈盛んになつた。その多くは修辭の末節に拘泥したものであつたが、やがて和歌の價値を宗教的に解釋し、和歌の本質を幽玄美に歸着せしめたのは、時代相を反映した大きな收穫であつた。

五　謠ひ物の流行

今樣の成立　謠ひ物には、平安初期に神樂・催馬樂があり、平安盛期には朗詠が行はれた。朗詠は、和漢の詩文の佳句を二句づつとり、こ

れに曲節をつけて謠ふもので、それを集めた書に公任の「和漢朗詠集」があり、末期に入つてからも、基俊が「新撰朗詠集」を編んでゐる。この二書は、詩文と竝べて和歌をも採つてゐるが、詩句はもとより和歌も古人のものばかりで、清新な文學といふことは出來ない。



今様譜

朗詠の外に、舟歌・田植歌などの民謠もあつたが、歌詞は傳つてゐない。要するに、貴族全盛の平安盛期には、謠ひ物の見るべきものが無かつたが、末期に入つて、稍著しいものが現れた。

その一は遊宴の餘興に行はれた雜藝であり、その二は佛寺の法要に行はれた和讃である。ともに詩形の自由なものであるが、やがて七五四句の今様に統一せられて、民衆的性質の濃厚な謠ひ物となり、この時代から次代へかけて流行した。民衆文藝の萌芽を示すものとして注意すべきものであらう。

梁塵秘抄　雜藝今様を集めたものに、後白河法皇御撰の「梁塵秘抄」がある。當時の謠ひ物を知る上に、貴い資料である。

佛は常にいませども　うつゝならぬぞあはれなる　人の音せぬ曉に　ほのかに夢に見え給ふ

舞へ舞へかたつぶり　舞はぬものならば　馬の子や牛の子にくゑさせてむ　踏みわらせてむ　誠に美しう舞うたらば　華の園まで遊ばせむ

瀧は多かれど　うれしやとぞ思ふ　鳴瀧の水　日は照るともたへてとうたへやれことつとう（梁塵秘抄）

○くゑさせ―壞させ。
○とうたへ―瀧の音。
○やれことつとう―囃し言葉。

一　概說

第六章　鎌倉時代――武士文學興隆時代

後鳥羽天皇の建久三年（一八五二）、源頼朝が鎌倉に幕府を開いて、こゝに新しく武士文化を建設することとなつた。而して頼朝は、平家の失敗した跡に鑑みて、文弱な貴族の模倣を戒め、質實剛健を旨として、意志の鍛練と協同の訓練を奬勵した。この方針を立てた源氏は暫くにして亡びたが、その後を受けた北條氏がやはりこの方針を繼承したので、鎌倉武士の生活は、平安貴族のそれと、凡そ對蹠的なものであつた。即ち平安貴族は靜的・室内的・個人的で教養が高かつたが、鎌倉武士は動的・戸外的・衆團的で教養が低い。從來の貴族文學は到底彼等に適しないので、新樣式の文學が工夫せられた。耳に聞いて多衆と共に樂しむ謠ひ物・語り物、一箇の作品を協同して完成する連歌が、武士の爲の新興文學として興隆したのである。新時代を代表する新興階級は武士であるが、衰へたとはいへ、平安貴族も亦永い教養の力によつて、傳統の文學を製作し續けた。なほこの外に、貴族文學から武士文學に移る過渡的な中間文學として、末期貴族の爲には過去の追憶を樂しましめ、新興武士の爲には教養向上の助けとなる、傳說的・趣味的又は宗教的・道德的な說話文學が喜ばれた。

かうして、この時代には、貴族文學と中間文學と武士文學と三態の文學が竝び行はれたのであつた。

二　前代散文學の繼承

物語　この時代にも「住吉物語」「石清水物語」「風につれなき物語」「苔の衣」などの物語が作られたが、平安末期の作品よりも更に低下した、生氣の乏しいもので、一括して擬古物語と呼ばれてゐる。

日記・紀行　前代の女流日記同樣な、都會生活を記述したものには、見るべき作品もないが、この時代の新しい傾向として、長途の旅行をするものがあり、その紀行に勝れた作品があつた。その一は、藤原

爲家の後室阿佛尼が實子爲相の所領を回復する訴訟の爲に、か弱い女性の身で遙々鎌倉に下つた時の旅日記「十六夜日記」で、文章は修辭に煩はされた擬古文であるが、その間から強い母性愛が滲み出てゐる。その二は「海道記」及び「東關紀行」で、この二書の作者は明らかでないが、共に都から鎌倉に下つた男子の紀行で、これには「十六夜日記」のやうな熱情はないが、その文章は、對句の多い、漢文調を交へた、和漢混淆の新文體である。

目離れせざりつる程だに、荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、慕はしげなる人々の袖の雫も、慰めかねたる中にも、侍從大夫などの、あながちにうち屈したる樣、いと心苦しければ、さま〴〵言ひこしらへ、傍に書きつく。

とゞめ置く古き枕の塵をだにわが立ち去らば誰か拂はむ。（十六夜日記）

橋本といふ所に行き着きぬれば、聞きわたりしかひありて、氣色いと心すごし。南には潮海あり、漁舟波に浮ぶ。北には湖水あり、人家岸に列なれり。その間に洲崎遠くさし出で、松きびしく生ひ續き、嵐頻に咽ぶ。松の響波の音いづれと聞きわき難し。

○袖の雫―袖を濡らした涙。
○侍從大夫―爲相とその弟爲守。
○橋本―靜岡縣濱名郡。

行く人、心を痛ましめ、止まるたぐひ、夢を覺まさずといふ事なし。湖に渡せる橋を濱名と名づく。古き名所なり。朝立つ雲の名殘、何處よりも心細し。（東關紀行）

隨筆　自由な形で自己の感想・思想を語る隨筆には、この時代の目まぐるしい社會的變革を反映して、特殊な作品が出來た。鴨長明の「方丈記」が卽ちそれである。これは大火・大風・平家都落等、作者の見聞した悲慘な事件を例證として、作者の厭世的人生觀を理路整然と述べたもので、文章は流麗な和漢混淆體である。

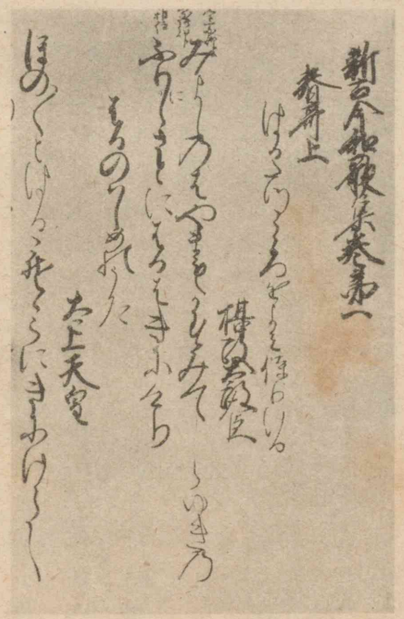
ゆく川の流れは絕えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく留まることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都のうちに棟を竝べ甍を爭へる、高き卑しき人の住居は、世々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。（方丈記）

○うたかた―泡沫。
○あるは―或は。

三　和歌の趨勢

新古今集　「千載集」の後、十餘年を經て、後鳥羽上皇が源通具・藤原有家・

同定家・同家隆・同雅經の五人に仰せて古今の秀歌を選ばしめ給ひ、元久二年（一八六五）撰を了へたのが「新古今集」である。さきに「千載集」に示された、幽玄美の探求と客觀的表現とは、この集に至つて完成の域に達し、更に清新な倒置法、餘情の深い體言止、内容を豊かにする本歌取など、修辭上の技巧を盡して、貴族文學としての和歌は、遂にその極致を究めた。



新古今和歌集（前田本）

當時の歌人には、撰者の定家・家隆、藤原良經・寂蓮法師、女流の式子内親王・宮内卿・俊成の女等勝れた人が多く、その上に立たせられた後鳥羽上皇は殊に秀れた御歌才でいらせられた。

見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけん　（後鳥羽上皇）

奥山のおどろの下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせん　（同）

春の夜の夢の浮橋とだえして峯に分るゝ横雲の空　（藤原定家）

駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ　（同）

いかにせん來ぬ夜あまたの郭公待たじと思へば村雨の空　（藤原家隆）

滋賀の浦や遠ざかり行く波間より凍りて出づる有明の月　（同）

人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後はたゞ秋の風　（藤原良經）

散りにけりあはれ恨みの誰なれば花のあととふ春の山風　（寂蓮法師）

山深み春とも知らぬ松の戸にたえ〳〵かゝる雪の玉水　（式子内親王）

花誘ふ比良の山風吹きにけり漕ぎ行く舟の跡見ゆるまで　（宮内卿）

橘の匂ふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする　（俊成女）

○駒とめて―萬葉集に「くるしくも降りくる雨かな三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに」とあり、佐野は紀伊國。

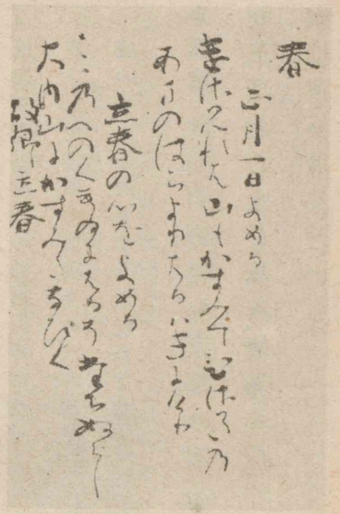
○橘の―古今集に「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。」

金槐集　貴族的巧緻な京都の歌壇に對し、ひとり鎌倉にあつて、雄渾な萬葉調の歌を詠み、異彩を放つた歌人に武人源實朝があり、その家集を「金槐集」といふ。

山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心わがあらめやも

時により過ぐれば民の歎きなり八大龍王雨やめ給へ

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる



金槐集（藤原定家筆）

新古今以後の歌風　前代の「千載集」以來、俊成・定家の父子が相次いで歌壇の總帥となり、爾來歌道の師範家はその子孫に限られるやうになり、師範家はその地位を保つ爲に煩瑣な法式を立てて、獨創的な表現を禁じてしまつたので、和歌はたゞ沈滯して行くばかりで、勅撰集はその後「新勅撰集」以下八部の多きに亘つて撰ばれたが、遂に清新の歌風を望むことが出來なかつた。

四　說話文學の展開

前代に發達した史傳文學の中、「榮華物語」「大鏡」に端を發した歷史文學は、後に述べる軍記物として新時代の新しい文學形態を作り、「今昔物語集」に示された傳說文學は、そのまゝ通俗平易な說話文學として展開し、一には衰へ行く貴族の爲に過去の夢を樂しましめ、又一には新興の武士に豐富な知識を授けることとなつた。いづれも興味のある說話を材料として、これに宗教的道德的意義を加へたものであるが、その傾向の多少によつて、趣味的說話と啓蒙的說話との二に分ける。

趣味的說話　「今昔物語集」の直系で、趣味的說話を集めたものに「宇治拾遺物語」がある。作者は不明、建保の頃（一八七三）の作で、時代の新しい傾向として教訓的な態度が加はり、又「鬼に瘤取らるゝ事」「雀恩を報ずる事」等の童話も交つてゐる。同じ系統の「古今著聞集」は建長六年（一九一四）橘成季の著で、此の期に於ける說話文學中最も大部の書である。

○宇治拾遺とは、「今昔物語集」を一名「宇治大納言物語」といふので、その物語の遺漏を蒐集するとの意。

啓蒙的說話　作者が指導的立場に立つて、說話を例として、道德的又は宗教的啓蒙を試みたものには、その道德的なものに「十訓抄」がある。建長四年（一九二）の作で、「心操・振舞を定むべき事」「憍慢を離るべき事」「人倫を侮るべからざる事」「人の上に多言等を誡むべき事」「朋友を撰ぶべき事」など十項に分つて、それ〴〵多くの例話を擧げてゐる。宗教的なものには、平康頼の「寶物集」、西行法師の作といふ「撰集抄」、鴨長明の作といふ「發心集」、無住法師の「沙石集」などがある。「寶物集」は、世の中に色々の寶物があるが、第一の寶物は佛教の信仰であると說いて居り、他の書も皆佛道歸依の大切なことを述べてゐる。

我が朝には、山陰中納言筑紫へ下り給ひける道に、鵜飼の殺さんとしける龜を買ひて、放ちてけり。その後、若君の二つばかりなるを具し給へるを、纖母・乳母と心を合はせて、取りはづしたるあやまちのやうにて、海に落し入れつ。中納言あさましと思ふ程に、放ちつる龜、その兒を甲の上にのせて、船のはたに置きたりければ、とりあげてけり。此の事、如夢僧都の物がたりとて、人ごとに知りたれば、こまかに記さず。（十訓抄第一）

○山陰―藤原氏、仁和四年歿。
○如夢―山陰の子この話の若君。

五　軍記物語の新興

さて、武士の新しく勃興したこの時代を代表する文學は軍記物語である。彼等武士は、これまで幾度か鬪爭した結果、現在の地位を獲得したもので、生活の主力を鬪爭の勝利に置いたが、すべてを犧牲にして鬪爭した後には、社會及び人生を批判して、社會の欠陷を救ふ道德的進歩を求め、人生の無常を觀ずる宗教的情緒に浸るやうになつた。そこで、前代の歴史文學・歴史物語が典雅華麗の貴族生活を主題としてこれを讃歎したのに對して、當代の歴史文學、軍記物語は力戰苦鬪の武士生活を主題として、これを道德的に批判し、又は宗教的に詠歎してゐるのである。このやうな軍記物語に次の四書がある。

保元物語・平治物語　作者は分らないが、二書同一人の作であらう。「保元物語」は後白河天皇の御即位（一八五）から凡そ三十年間の歴史を保元

の亂を中心として記したもので、人物では源爲朝が最も活躍してゐる。「平治物語」は後白河天皇の御讓位(一八一八)から賴朝の歿するまで凡そ四十年間の歴史を平治の亂を中心として描き、人物では源義平が活躍してゐる。ともに勇壯な記述で、その中に、刑罰論・選敍論・忠孝論などの政治的道德的批評を交へてゐる。文章は勇健な和漢混淆體である。

平家物語　これは琵琶法師の語り物として作られ、語り續けられたもので、異本の種類も多く、作者も明らかでない。前後十二卷の中、卷七までは清盛を中心として平家の榮華を描き、後半は平家の衰退・沒落を述べたもの、卽ち平家の榮枯盛衰を本流としたものであるが、その間に樣々の挿話を加へてゐる。文章は大體和漢混淆文であるが、美しい景情を描くには貴族的優雅な趣味を以てし、感傷的な事件を敍するには諸行無常の佛教思想を以てし、その內容に應じて筆致を變化させて、宛も繪卷物を見るが如き興趣を覺えしめ、血腥い爭鬪史といふよりは、大きな悲劇的敍事詩又は感傷的抒情詩として綴られてゐる。かくて「平家物語」の與へるところは、この時代に通有の雜駁な知識ではなく、又啓蒙的な社會批判でもなく、痛切な時代相を通じて洗練せられた悲哀感卽ち「物のあはれ」である。

琵琶法師

逢坂山うち越えて、勢多の唐橋駒もとどろと踏み鳴らし、雲雀上れる野路の里、志賀の浦浪春かけて、霞に曇る鏡山、比良の高峯を北にして、伊吹の嶽も近づきぬ。心をとむとしなけれども、荒れてなか〳〵やさしきは、不破の關屋の板廂、いかに鳴海の汐干潟、涙に袖はしをれつゝ、かの在原の某の唐衣きつゝなれにしと詠めけん、三河の國の八橋にもなりぬれば、蜘蛛手にものをとあはれなり。濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江にさわぐ波の音、さらでも旅はもの憂きに、心を盡す夕まぐれ、池田の宿にも着き給ひぬ。(卷十、海道くだり)

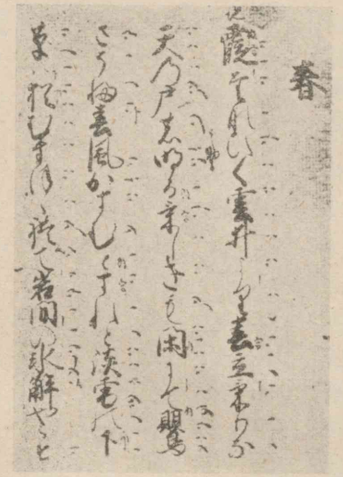
○逢坂山―平重衡が捕はれて鎌倉に下る途次。

○唐衣―業平の歌「唐衣きつゝ馴れにしつましあれば遙々きぬる旅をしぞ思ふ」

源平盛衰記　「平家物語」と同じ時代を取扱つた四十八卷の大部の書であるが、これは和漢の故事・傳說の蒐集記載が主になつてゐて、構造が散漫で感情が稀薄である。

六　謠ひ物の流行

この時代には教養の低い武士・民衆を對象とした謠ひ物が流行した。その一が宴曲で、他は和讃である。



宴曲集（西本願寺本）

宴曲　宴遊に用ひる歌曲といふ意である。一篇の歌詞は甚だ長いが、內容には淸新なものがない。これを集めた書に、正安（一九六一）三年沙彌明空の「宴曲集」「宴曲抄」などがある。

霞たなびく雲井より　春立ちけりな天の戸の　明くる氣色ものどかにて　鶯さそふ春の風　かすむとすれど淡雪の　下草はなほむすぼれて　岩間の氷解けやらず（下略）（宴曲集、春）

和讃　和文で佛德を禮讃する和讃は、平安時代から行はれてゐたが、鎌倉時代に入つては、淨土宗・淨土眞宗・日蓮宗等の日本佛教が新しく起つたので、その宣傳文學として盛んに行はれた。文學としては第二義のものであるが、民衆の齊唱に適した、聲調の整うたものが多い。

早く萬事を投げすてて　一心に彌陀を賴みつゝ　南無阿彌陀佛と息たゆる　これぞ思ひの限りなる　この時極樂世界より　彌陀觀音大勢至　無數の恒沙の大聖衆　行者のまへに顯現し　一時に御手を授けつゝ　來迎引接たれ給ふ（一遍上人別願和讃）

七　連歌の獨立

連歌はもと和歌の上句と下句とを二人で唱和するところから發達したもので、その源流は遠く大和時代に溯り、平安時代には既に

○觀音大勢至―阿彌陀如來の脇士で、彌陀と共に三尊といふ。

やゝ廣く行はれてゐたが、その頃は、和歌の餘技として取扱はれ、獨立の文學的價値を認められてゐなかつた。ところが、鎌倉時代に入つて、和歌は嚴しい法式に束縛せられてしまつたので、その餘技である連歌に新しい境地を開拓することとなり、上下の二句にとどまらず、五十韻・百韻などの長篇をも續けるやうになつた。そしてこの連歌は、他人の句に自分の句を聯ねて、その間の聯絡に興味を持つものであり、殊に協同して連續的な長篇作品を作ることに一層の興味を覺えたもので、この協同製作が武士の生活樣式と一致したので、武士時代にふさはしい新文學として發展することとなつたのである。尤も、その初期は、主として和歌の煩瑣を厭ふ歌人の間に育成せられたが、和歌に手出しの出來なかつた僧侶・武士が好んで連歌に心を傾け、やがて地下から連歌の名人が出るに及んで、こゝに全く和歌から獨立した民衆文學として成立したので

ある。その第一人は花園天皇の頃に名聲を博した善阿法師で、彼の門下からまた救濟・周阿の如き名人が出て、次の吉野・室町時代にその大成を見ることとなつた。

絶えぬ煙とたちのぼるかな
春はまだ淺間のたけの薄霞　（藤原爲家）

花も老木の姿なりけり
枝殘る柳の眉の薄みどり　（善阿法師）

つれなきはおのれ獨りの郭公
すみ得ぬ人は山を出づなり　（同）

第七章　吉野・室町時代——劇文學成立時代

一　概說

元弘三（一九九三）年後醍醐天皇は北條氏を討滅して、百餘年前悲しくも隱岐

の小島で崩御あらせられた後鳥羽上皇の御素志を遂げさせ給うたが、大業成つて、未だ歳月も過ぎない間に、足利尊氏の反に遭ひ、難を吉野に避けさせ給うた。當時京都方の勢ひが盛んで、國民はややもすれば歸趨に迷ふ狀勢であつた。吉野朝の人々は辛苦艱難に堪へて、ひたすら皇道の發揚に努められたのである。

爾來六十餘年を經て、元中九年(一三〇五二)內裏は再び京都に復せられ、武家も亦京都の室町に幕府を置いた。この頃、武士は既に文弱豪奢に傾いてゐた一方、貴族は久しく困苦缺乏に堪へて簡素質實を好むやうになり、兩者の生活態度が次第に接近して來たところへ、今は同じ都に起居することとなつた上に、禪僧が公家と武家との間を往來して、双方の聯絡を滑かにしたので、これまでそれ〴〵獨自の立場にあつた貴族文化と武士文化とが急速に調和融合する機運に向つた。かうして武士的豪放な氣風と貴族的纖細な趣味と、それに禪味を加へて、複雜錯綜した種々相を統合してゆくのが、室町時代一般の趨向であつた。

文學界の狀勢も亦從つて、吉野時代と室町時代との間に著しい相異があつた。即ち吉野時代には貴族文學を復興して、尊皇興國の精神を高調して居り、室町時代には、貴族文學と武士文學との距りを去つて、新興文學を創作し、時代の種々相を反映しつゝ、國民精神の向ふ所を示さうとした。新興文學の中、最も著しいのは劇文學を創作したことで、その中でも殊に謠曲は、形態上には、あらゆる傳統文學を綜合して、複雜を單純化した統合美を發揮し、思想上には、上古以來の傳統精神を集成して、堅實な國民道德を樹立し、一には室町文學を代表し、一には後代文學の指針となつたのである。

二　吉野時代の文學

この時代の貴族は、前代の貴族のやうに、沈滯した生活をたゞ文學

によつて慰めたのではなく、抑へ難い熱情を文學に託したのであるから、文學の內容が充實して、生氣の溢れるものとなつた。

新葉集　この時代にも、京都で「風雅集」以下四部の勅撰集を撰ばれたが、それらは前代の勅撰集と同樣な陳套の歌風で、見るべきものはない。たゞ長慶天皇の弘和元年（二〇四一）宗良親王の御撰に成つた「新葉集」二十卷は、吉野朝の君臣の和歌を收められたものであるから、尊貴の御方々の哀切な御體驗、不拔の御英氣が拜せられ、又忠臣の慨世憂國の至情がしのばれて、人の肺腑を貫くものがある。

埋るゝ身をば歎かずなべて世のくもるぞつらきけさの初雪　（後醍醐天皇）
君のため世のため何かをしからんすててかひある命なりせば　（宗良親王）
思ひきや手もふれざりし梓弓おきふしわが身なれんものとは　（同）

增鏡　「大鏡」の系統を引いた歷史物語に「增鏡」がある。吉野初期の作であるが、著者は分らない。後鳥羽天皇の御降誕（一八四〇）から後醍醐天皇の北條氏御討滅（一九九三）までの歷史を記したもので、承久・元弘兩度の御討幕を全篇の首尾として、朝威の御伸張を力說したもの。流麗な擬古文の中に尊皇の熱誠が溢れてゐる。

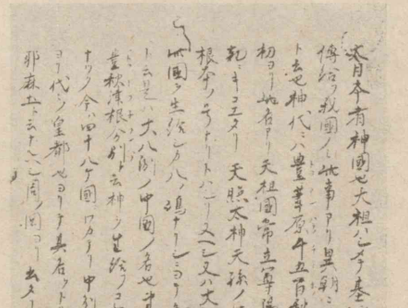
六月六日、東寺より常の行幸のさまにて、內裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉もなし。「去年の春いみじかりしはや」と思ひいづるも、たとしへなし。今も御供の武士ども、ありしよりはなほ幾重ともなくうち圍み奉れるは、いとむくつけきさま、なれど、こたみはうとましくも見えず。たのもしく、めでたき御まもりかなとおぼゆるも、うちつけ目なるべし。世のならひ、時につけてうつる心なれば、皆さぞあるらし。
（第十七、月草の花）

○六月六日―元弘三年。
○去年の春―隱岐島へ御遷幸。

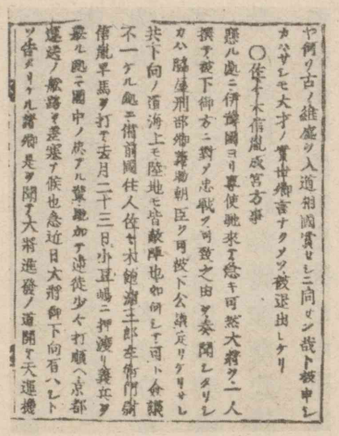
神皇正統記　歷史物語より更に進んだ史論の書に「神皇正統記」がある。これは吉野朝の忠臣北畠親房が兵馬倥偬の間に執筆したもので、まづ卷頭に「大日本は神國なり」と道破し、神國思想を中心として、神代から後村上天皇まで御歷代の御事蹟を敍べ、堂々たる態度と熱烈な氣慨とを以て、國體の本質を明らかにし、大義名分を正し

て、世道人心の覺醒を促してゐる。後世に大きな影響を及ぼした。

凡そ王土にはらまれて、忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その跡をあはれみて、賞せらるゝは、君の御政なり。下としてはきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望を致す事、自ら危むるはしなれど、前車の轍を見る事は、誠にありがたき習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ずおごる心あり。果して身を亡ぼし家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。（第六）


神皇正統記（猪熊本）

太平記　この時代の軍記物語に「太平記」四十卷があり、作者は小島法師といはれてゐる。（一九七八）これは後醍醐天皇の御即位から後村上天皇崩御の前年まで五十年間に亘る天下の治亂を、巨細に記し、その間に多くの故事・逸話を挿んだもので、前代の「平家物語」に比べると、佛教的無常觀は薄らいで、軍略的・政治的及び道德的批判が著しく濃厚になつてゐる。（二〇二七）全篇一體に尊皇興國の精神が流れてゐるが、殊に吉野朝盡忠の士の記事には、讀者を感銘せしめることが深い。文章は絢爛雄渾、情理を整へて人に迫るものがある。この讀み方について、太平記讀といふ強い朗讀法が工夫せられ、江戸時代の軍書讀講談の先驅となつた。


太平記（慶長活字本）

○安倍野の合戰―正平二年十一月楠正行が山名時氏、細川顯氏と

二　吉野時代の文學

安倍野の合戰は、霜月廿六日の事なれば、渡邊橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、甲斐なき命を楠に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚

に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠情ある者なりければ、小袖を脱ぎ替へさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。此の如く四五日皆勞りて馬に乘る者には馬を引き、物具をきせて、色代してぞ送りける。されば敵ながら其の情に感ずる人は、今日より後心を通ぜん事を思ひ、其の恩を報ぜんとする人は、やがて彼の手に屬して後、四條縄手の合戰に討死をぞしける。（卷廿六）

戰ってこれを破つた。

○色代―禮、挨拶。

義經記・曾我物語　軍記物語系統から出た傳記文學に「義經記」と「曾我物語」とがある。作者は分らないが、吉野時代末或は室町初期の作であらう。一は、源氏の興隆に隨一の武功をたてながら、數奇の運命に弄ばされた優雅な武將義經の一生を記し、他は父の仇を討つて武士道德を發揮した薄倖の孤兒曾我兄弟の一生を記したもので、共に廣く愛讀せられて、後の文藝に大きな影響を與へた。その文章は平明流暢で、先進の軍記物語と後出のお伽草子との中間に位してゐる。

徒然草　なほ一つ、隨筆「枕草子」に學んで、更に一段の進境を示した、

この時代の傑作に、兼好法師の「徒然草」がある。全篇二百四十餘段から成り、四季の風景・行事、見聞の記錄・述懷、有職・故實など、樣々の事相を捉へて、筆にまかせて書き綴り、その間に、堂々たる議論文を挿んでゐる。その中心思想は佛教の無常觀にあるやうであるが、儒教思想も老莊思想も古典趣味も交つてゐて、一見甚しく矛盾撞着するやうであつて、而も全篇を通じて、兼好の個性が一貫してゐる。それは老莊思想も儒教思想も、その一面が彼の寛容な趣味性に迎へられた時に、たやすくその全面が肯定せられ、かくてあらゆるものを肯定し、これを統合して、全體的に醇化させ調和させてゐるの

兼好法師像

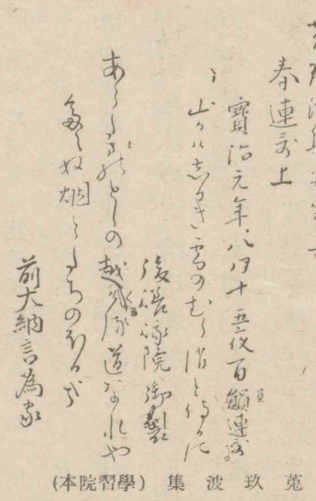
である。文體も亦新古・雅俗・剛柔その時々のよろしきに應じながら、全體を通じて平淡な雅趣を失つてゐない。かうした相剋性の寛容、複雜性の統合、多角性の調和が「徒然草」の特色であつて、やがて次代室町文學の趨向を示唆してゐるのである。

今樣の事どものめづらしきをいひ廣めもてなすこそ、又うけられね。世にことふりたるまで知らぬ人は、心にくし。今更の人などのある時、こゝもとにいひつけたることぐさ、ものの名など、心得たるどち、かたはしいひかはし、目見あはせ、笑ひなどして、心知らぬ人に、心得ず思はすること、世なれず、よからぬ人の、必ずあることなり。

三

連歌の大成

連歌集の撰修　連歌は、鎌倉時代の末、善阿等の力によつて和歌から獨立したが、吉野時代に入ると、善阿及びその高弟救濟の教へを受けた攝政二條良基が、救濟と謀つて、最初の連歌集「菟玖波集」を撰び、（一三〇六）正平十一年成り、翌年勅撰集に准ぜられて、こゝに全く和歌とその地位を代へるに至つた。良基・救濟・周阿等が當時の名人であつた。



菟玖波集（學習院本）

松風も山と里とやかはるらん
しぐれのうへは峯のしら雪　（二條良基）

舟路のあとの山はいづくぞ
松ばらのきのふは見えしあさがすみ　（救濟法師）

けぶりにくらき庵の窓かな
蚊やり火のもゆる螢のかげながら　（周阿）

連歌の大成　その後、連歌の名手が相次いで出たが、最も功のあつたのは宗祇で、彼は西行に倣つて東西諸國を遍歷し、連歌を普及するとともに、その藝術的向上を圖り、發句の妙を發揮する一方、附句の獨立的價値を主張した。（一四八一）長享二年高弟肖柏・宗長とで賦した「水無瀬三吟百韻」は、劃期的な作品として、後世に模範を示すものであつ

○雪ながら―後鳥羽上皇御製「見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけん」に據つた。

た。次いで明應四年（一五〇五）「新撰菟玖波集」を撰んで、再び勅撰集に准ぜられ、連歌はこゝにその大成を見たのである。

雪ながらやまもとかすむ夕かな　宗祇
行く水遠く梅にほふ里　宵柏
河かぜに一むらやなぎ春見えて　宗長
舟さすおともしるきあけがた　祇
月やなほきり渡る夜に殘るらん　柏
霜おく野はら秋はくれけり　長

（水無瀬三吟百韻）

俳諧連歌　連歌が藝術的に高められるに從つて、また別に平民的な自由を求めて、滑稽洒落を旨とした俳諧連歌が發生した。その代表作家が室町末期の山崎宗鑑（そうかん）と荒木田守武（あらきだもりたけ）とで、宗鑑は永正十一年（一五一四）の頃「犬筑波集」を撰び、守武は天文九年（一五四〇）に「獨吟千句」を出した。未だ卑俗な趣味を出ないが、やがて江戸時代俳諧興立の素地を作つたのである。

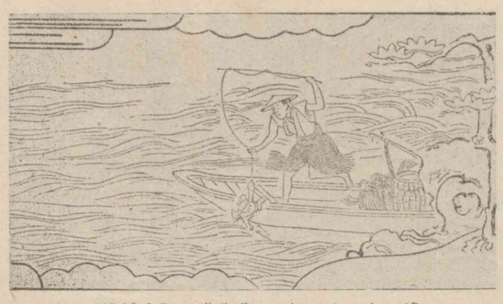
四

お伽草子・幸若

お伽草子　室町時代には百數十種の小說が作られたが、いづれも教養の低い庶民を對象として、讀み易く分り易く綴つた通俗小說ばかりで、これらをお伽草子と總稱する。尤もその中には「小落窪」などのやうに物語系統の貴族姫君を主人公としたものや、「田村草子」「俵藤太（たはらとうだ）物語」などのやうに、軍記物系統の武人を主人公としたものもあるが、代表的な作品は、「一寸法師」「物ぐさ太郎」「文正（ぶんしやう）草紙」「浦島太郎」などのやうに、庶民を主人公としたもので、これらの人物は不具か變質か貧困か、いづれにしても最も憐れむべき人々であるが、兩親が神佛を信仰してゐた靈驗か、本人が一藝を心得てゐた爲か、

とび梅やかろ〳〵しくも神の春
われも〳〵とからすうぐひす
のどかなる風ふくろふに山見えて
目もとすさまじ月のこるかげ　（獨吟千句）

或は善根を施した功徳かによつて、意想外の幸福を得るといふ趣向のものである。勿論文學價値の高いものではないが、當代の作家が、鎌倉時代の擬古物語作家のやうな空疎な文藝的虚榮心を離れて、民衆文藝の樹立に志したこと、そしてこれらの作品が一方には童話の素材となり、他方には江戸時代庶民文學の先驅となつたことに注意すべきであらう。



浦島太郎（御伽草子版本挿繪）

昔丹波國に浦島といふものはべりしに、その子に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四五の男ありけり。あけくれ海のうろくづを取りて父母を養ひけるが、或日のつれ〴〵に釣をせんとて出でにけり。浦々島々入江々々、至らぬ所もなく釣をし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしけるところに、忽じまが磯といふ所にて、龜を一つ釣り上げけり。浦島太郎、この龜にいふやう、「汝生あるものの中にも、鶴は千年、龜は萬年とて、命久しきものなり。忽ちここにて命を絶たんこと、いたはしければ助くるなり。常にはこの恩を思ひ出すべし。」とて、この龜をもとの海にかへしけり。（浦島太郎）

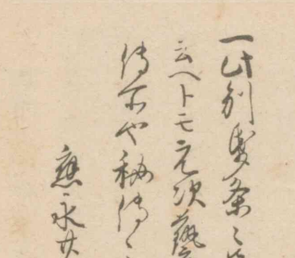
幸若　室町初期、桃井幸若丸が創始したといはれてゐる幸若舞は鼓に合はせて語り且舞ふ一種の舞臺藝術であるが、その詞章「舞の本」は、お伽草子と變りのないものである。たゞお伽草子は庶民を對象としたのに對し、これは武士を對象として居り、從つてその題材も武人傳說ばかりで、殊に「富樫」「笈さがし」「高館」などの判官傳說、「元服曾我」「小袖曾我」などの曾我傳說が、全體の半ばを占めてゐる。

さる程に、曾我兄弟の人々は、富士野への暇乞のその爲に、母上に參らるゝ。祐成仰せけるやうは、「いかに五郎殿、御身は暫く待ち給へ。まづ某一人參り、御機嫌を伺ひ申し、御身の訴訟申さん」とて、母上に參り、富士野への暇乞をぞ申されける。母上聞召されて、「富士野とは音に聞えたる雪のある所なれば、定めて夜寒なるべし」とて、御小袖を下さるゝ。（幸若、小袖曾我）

○訴訟―五郎の勘當をゆるされるやう願ふこと。

五　謡曲

成立　劇の原始的な形は、歌謡などと共に、上代から行はれてゐたが、その後殆ど發達しなかつた。たゞ平安時代にも、外來樂から出た猿樂、民間に行はれた田樂があり、樂器に合せて樣々の曲藝を演ずる外、通俗な歌舞や滑稽掛合噺の如きものを演じてゐた。この掛合噺を主體として、これに優美な歌舞、寫實的な所作を加へた、劇的演藝が次第に發達し、これを「猿樂の能」「田樂の能」といつた。かうしてほゞ演劇的形態の整つた室町時代の初め、奈良春日神社附屬の猿樂師に觀阿彌・世阿彌といふ父子の天才が出



世阿彌筆蹟

て、足利義滿保護の下にその發達に努力し、殊に世阿彌は卓拔な識見と偉大な伎倆をもつて、古來の文學・舞踊・音樂を綜合し、傳統的日本精神を具現した樂劇を完成した。これが現在も行はれてゐる能樂である。

種類・脚色　能樂の材料は、古來の神話・傳說・和歌・物語・軍記・巷說など、あらゆる方面から採つてゐるので、種類も甚だ多いが、大別して、(一)神德を稱へ國家の安泰を祝ふ神事物、(二)源平等の武士を主人公として戰鬪の樣を描く修羅物、(三)優雅な女性を主人公とする鬘物、(四)武士の情義、親子の情愛などを描く現在物、(五)鬼神・畜類などを主人公とする鬼畜物の五種類とする。この中、現在物以外の大部分は、シテ(主人公)卽ち神體又は武將・佳人の亡靈がワキ(相手役)の夢に現れて、神威を示し又は昔の樣を再現するといふ脚色で、やがて觀衆も亦ワキと同樣、神體の影向を拜し、又は昔の人と相接するが如き

夢幻境に入るところに、能樂獨得の妙味を發揮してゐる。

詞章・思想　謠曲は卽ちこの能樂の詞章で、七五調の歌謠體に雅文・和漢混淆文・候文など各種の散文體を巧みに織り交ぜた絢爛優雅な文體であるが、その間に幽玄靜寂の風韻を潛めて、滋味の豐かな文學を成してゐる。謠曲には和語・漢語の外に佛語をも多く用ひてゐるが、その中心思想は佛敎の無常觀ではない。神國思想を中心とし、尊皇愛國を主眼として、忠孝仁義の國民道德を鼓吹したもので、その女性觀に於ても、特に母性愛を强調し、寬容の美德を讃へてゐるのは、甚だ注意すべきことであらう。

ワキ(黑主)「よく〳〵物を案ずるに、かほどの恥辱よもあらじ。自害をせんと罷り立つ。シテ(小町)「なう〳〵暫く。この身皆以てその名ひとりに殘るならば、何かは和歌の友ならん。道を嗜む志、誰もかうこそあるべけれ。子方(主)「いかに黑主。ワキ「御前に候。子方「道を嗜む者は誰もかうこそあるべけれ。苦しからぬ事、座敷に直り候へ。ワキ「これ又時の面目なれば、宣旨をいかで背くべき。黑主御前に畏る。地「げにありがたき

○恥辱―黑主が小町の歌を萬葉集に書き入れ、それを古歌と謾奏して見破られたこと。

○春來つて―朗詠集に「春來つてはこれ桃花の水、仙源を辨へず何處をか尋ねん」

六

狂言・小歌

狂言　古態の猿樂から典雅嚴肅な能樂が發達した一方、もとの滑稽的要素を保つて喜劇的發達を遂げたのが狂言である。謠曲と同じ頃に成立したのであるが、その作者は分らない。能樂と狂言とは同じ舞臺で演ぜられるが、全く對蹠的な立場にあつて、謠曲が理

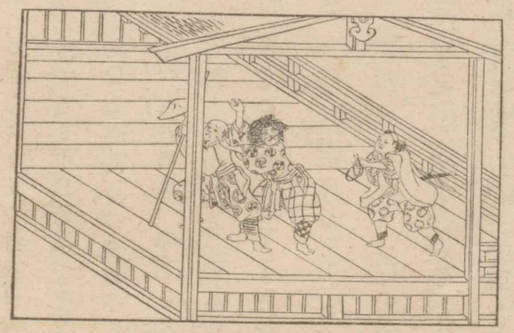
草紙洗小町

や重ぬらん（草子洗小町）

砌かな。小町黑主遺恨なく、小町に舞を奏せよと、おのおの立ちより花の打衣、風折烏帽子着せ申し、笏拍子をうち座敷を靜め、シテ「春來つてはこれ桃花の水、地「石に障りて遲く來れり。シテ「手まづ遮る花の一枝、地「もゝ色の衣

想實現の光明文學として、人の長所を採り美點を讃へて、道義の向上を奬めてゐるのに對し、狂言は現實暴露の諷刺文學として、人の短所を捉へ缺陷を描いて、行爲の反省を促してゐる。即ち狂言の主人公は、無學淺慮の大名、淺學無力の山伏、愚鈍怠惰の冠者などで、いづれも淺はかな行ひをして失敗するのである。文章も亦謠曲の如き莊重な古典的文語文ではなく、平易な當時の口語文で、脚色も甚だ簡單である。

強力「あゝ悲しや〳〵、蟹がはさみました。あいた〳〵〳〵。なう〳〵、こなたの行力は、かやうの時の爲でござる。早う祈り退けて下され。山伏「ちつとも氣遣ひすな、今の間に祈り退けて遣らうぞ。それ山伏と申すは、山に寢起をする故に山伏なり。この頭巾は、布切七八寸眞黑に染め、ひだを折つて、頭に戴くによつて頭巾なり。又この數珠は苛高ではない。むしやうな數珠珠をつなぎ集め、これを苛高の數珠と名づく。かほど貴き山伏が、一祈り祈るものならば、などか奇特のなかるべき。ぼろぼん〳〵〳〵。いろはにほへと、ぼろぼん〳〵〳〵。強力「申し〳〵、最早祈らずとおいて下され。こなたの祈らせらるれば、なほきつうはさみます。あいた〳〵〳〵（蟹山伏）



蟹　山　伏（狂言記）

○苛高―算盤珠のやうに角のある數珠。山伏が用ひる。

小歌　狂言の中には、屢、小歌を交へて居り、謠曲にもこれを採つてゐる。小歌とは、室町時代民謠の總稱で、句法長短は一樣でないが、民衆的な輕妙な調子のものが多い。これを集めたものに「閑吟集」がある。

菜蕗といふも草の名、若荷といふも草の名、富貴自在の德ありて、冥加あらせおはしませ。（狂言瞽女座頭）

幾度も摘め、生田の若菜、君も千代を積むべし。（閑吟集）

第八章　江戸時代前期——庶民文學普及時代

一　概說

慶長八年（一六〇三）德川家康が幕府を江戸に置いて、こゝにまた文化の中心地が公武分立することになつたが、家康は鎌倉時代に於ける源氏・北條氏とはちがつて、大いに學問を尊重し、文學を奬勵したので、江戸は忽ちにして文化の振興を見た。これより先豐臣秀吉の居城とした大阪は、豐臣氏滅亡の後も、諸國の物資を交易する商業の中心地として繁昌した。かうしてこの時代には、皇都の京都と政治の江戸と商業の大阪と、三都鼎立の勢ひを示した。その中、大阪は京都と近距離の地にあつて、彼我の往來が頻繁に行はれ、從つて兩地協力して文化の興隆を圖ることが出來たが、江戸は京都から遠く距てた新開地であつたから、直にこれを凌駕することは出來なかつた。勢ひ江戸時代前期の文化は京阪を主力とするものであつて、この時代を特に京阪時代ともいふ。

この時代に於ける社會の中心が武士にあつたことは、前代と變りがないが、別に新しく向上したものに町人がある。室町時代の末、群雄が地方に割據して、それ〴〵地方文化を建設したが、家康は諸大名を日本全國に布置したので、愈文化が一般的に普及し、經濟力が全般的に向上して來た。從つて經濟の任に當る町人の實力が漸く強大となり、殊にその中心地大阪に於ける町人の勢力は、武士もなほ及ばないものがあつた。こゝに於て新しく彼等に適當した文學を要求することとなつた。

かくして、この時代に於ける新文學は京阪を中心とし、庶民を對象としたもので、その實質は前代の民衆的文學の展開したものであ

つた。即ち俳諧連歌から發展した俳諧、お伽草子から出發した小說、幸若から展開した淨瑠璃などが、その主なものである。なほこの外、これまで沈滯しきつてゐた傳統文學については、古學復興の運動が起り、次の時代に入つて大きな成果を擧げることとなる。

二

俳諧の大成

古風　鎌倉時代に和歌から派生した連歌が獨立したやうに、この時代にはまた連歌から派生した俳諧が獨立して、新しい境地を開拓した。山崎宗鑑・荒木田守武等の俳諧連歌を繼承した松永貞德がその最初の人で、俳諧のをかしみを用語の上に求めて、連歌との區別を立てた。多くは幼稚な駄洒落に過ぎなかつたが、俳諧を普及する上に力があつた。この一派の俳風を後のものに對して古風といふ。貞德門下には北村季吟があり、季吟に學んだ女流俳人に田捨女がある。

霞さへまだらに立つや寅の年　（貞德）

しをるゝは何かあんずの花の色　（同）

一僕とぼく〳〵ありく花見かな　（季吟）

雪の朝二の字二の字の下駄のあと　（捨女）

談林風　貞德は新興の俳諧について、連歌と同樣な煩瑣な法式を立てたので、これを打開したのが、西山宗因である。宗因は輕妙な滑稽味を以て巧みに人事を捉へ、漢語・俗語を自由に驅使して、これを表現した。この一派の俳風を談林風といふ。宗因の門には井原西鶴がある。

花むしろ一見せばやと存じ候　（宗因）

白露や無分別なる置きどころ　（同）

長持に春ぞくれゆく更衣　（西鶴）

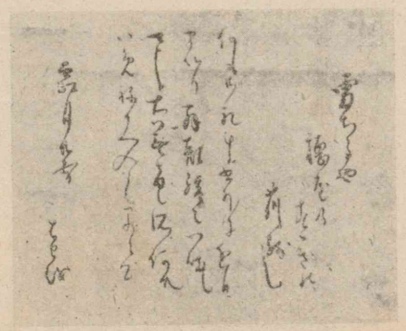
蕉風　宗因は俳諧の自由を主張したので、その末流は、泥鰻どもが天

井張つたと思ふらん氷かな」などといふ奇矯の句を詠んで得意とするに至つた。この輕薄な俳風を根柢から革新したのが松尾芭蕉である。芭蕉は初め古風の季吟に學び、次いで談林風に參じたが、中年の頃、參禪によつて修練を積み、自然を諦觀して獨自の俳壇を開き、幽寂高雅な俳諧道を樹立した。その俳風を蕉風といふ。芭蕉は旅から旅へ出て、殆ど一生涯自然の間に過した人で、旅行詩人としては、前に和歌の西行、連歌の宗祇があるが、幽玄閑寂味に徹した人は、芭蕉の外に求めることが出來ない。芭蕉の門下には榎本其角・服部嵐雪・向井去來・各務支考・森川許六など有力な俳人が多く、女流には智月尼・羽紅・渡會園女などの才媛があり、

芭蕉像（許六筆）

なほ其角の門からも秋色女が出た。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲　（芭蕉）
鶯や茶の木畑の朝月夜　（同）
五月雨を集めて早し最上川　（同）
名月や疊の上に松の影　（其角）
梅一りん一りんほどのあたゝかさ　（嵐雪）
應々といへどたゝくや雪の門　（去來）
船頭の耳の遠さよ桃の花　（支考）
新藁の屋根の雫や初時雨　（許六）
山ざくら散るや小川の水車　（智月尼）
霜やけの手をふいてやる雪まろげ　（羽紅）
すゞしさや日の落ちかゝる海の上　（秋色女）
負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな　（園女）



芭蕉眞蹟

俳文　俳人が俳諧の手法を散文に應用して作つたものを俳文といふ。これも芭蕉の手によつて大成したもので、その作に「奥の細道」

○和泉が城―和泉三郎忠衡の城。父秀衡の遺命を守り、義經の爲に泰衡と戰つた。
○國破れて―杜甫の詩。

「幻住庵記」などがあり、蕉風一派の俳文を集めたものに「風俗文選」がある。

衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡　（奥の細道）

三　小說の發展

假名草子　お伽草子の系統を引いた江戸時代初期の通俗小說に、如儡子の「可笑記」、鈴木正三の「因果物語」、「二人比丘尼」、淺井了意の「御伽婢子」「浮世物語」などがあり、これらを假名草子と總稱する。いづれも教訓と娛樂とを兼ねた幼稚な雜話集で、お伽草子よりも斷片的であるが、その中、「御伽婢子」は支那小說を飜案した怪談ものとして、「浮世物語」は當時の町人生活に觸れたものとして、やゝ注目に値する。

浮世草子　「浮世物語」に萌芽を見せた町人生活の描寫に成功したのが、井原西鶴である。西鶴はもと談林派の俳人であつたが、天和二（一六八二）年「一代男」を出して以來、草子の作者となつたもので、彼は大阪に住んで、新興階級町人の生活主力が、富を求める熱心と富を得ての享樂とに傾けられてゐることを看破し、鋭利な觀察・奇警な文章をもつて、縱横にこれを描寫した。「一代男」「五人女」「日本永代藏」「世間胸算用」などがその代表作で、これらは浮世卽ち現代の生活相を如實に描き出したものといふ意で、浮世草子と總稱する。

井原西鶴

○有德—金持。
○陰—年齡。
○見立—診察。
○分限—富豪。
○方組—處方。

四百四病は世に名醫ありて驗氣を得たる事必ずなり。人は智慧才覺にもよらず貧病の苦しみ、これを直せる療治のありやと、家有德なる方に尋ねければ、今までそれを知らず、養生盛りを四十の陰まで、うが〳〵暮されし事よ、少し見立遲けれども、未だよい所あるは革足袋に雪駄を常住はかるゝ心からは、分限にもなり給はん、長者丸といへる妙藥の方組傳へ申すべし△朝起五兩△家職二十兩△夜詰八兩△始末十兩△達者七兩、此の五十兩を細かにして、胸算用秤目の違ひなきやうに手合せ念を入れ、これを朝夕呑み込むからは、長者にならざるといふ事なし。（日本永代藏）

氣質本　西鶴の後には、その模倣作が多く出たが、その中に、江島其磧は「世間息子氣質」「世間娘容氣」「世間手代氣質」など、類型的な人物を描寫した作品を出したので、これらを氣質本といひ、またその出版書肆の名によつて、八文字屋本ともいふ。西鶴の如き俊鋭な觀察はなく、概ね非寫實的且說明的であつた。

淨瑠璃の成立

俳諧の芭蕉が自然の玄妙を凝視し、浮世草子の西鶴が庶民生活の

人間性を看破したのに對し、同じく庶民生活の社會性を描寫したのが、淨瑠璃の近松である。三者いづれも自然又は人生の眞實を探求しようとしたもので、その作品が時を同じうして元祿の頃に世に出たので、これを元祿文學といひ、わが國文學はこゝに本質的に一段の進步を見たのである。

古淨瑠璃　さて、淨瑠璃の名は、お伽草子の一種で、牛若丸の傳說を取扱つた「淨瑠璃十二段草子」から出たもので、室町時代の末期、盲法師などが扇拍子で語つてゐたが、慶長の頃から三味線に合はせて語り、また操人形に掛けることとなつた。最初は新作もなく、概ね幸若の詞章を流用したが、やがて坂田金時の子金平といふ怪勇無雙の主人公を描いたものが、江戸で流行し、これを金平淨瑠璃といつた。これは荒唐無稽蕪雜殺伐なもので、未だ洗練せられてゐない江戸武士の嗜好を反映するものであつた。その後、江戸又は大阪

で次第に淨瑠璃の改善が行はれたが、貞享二年（二三四五）竹本義太夫が大阪で操座を起して、曲節の豐かな義太夫節を創め、近松門左衛門が作者としてこれに協力し、翌三年（二三四六）「出世景清」を新作して以來、全く面目を一新することとなつた。それで、從來のものを古淨瑠璃といつて、新作と區別する。

近松門左衛門　近松の作品は百餘曲に及んでゐるが、大別して時代物と世話物の二とする。時代物では主として歴史的な武人傳說を取扱ひ、世話物ではすべて當時の庶民生活を描き出したが、そのいづれも庶民を聽衆とした作品であるから、武人の心操・行動をも庶民の理解に適するやうに引下げてゐる。即ち近松は義理と人情を庶民層の基本的道德とし、その葛藤を描くことによつて、義理・人情の調和した社會生活を要望したのである。矛盾した現實生活の實相を描いて、そこから行爲の規範を見出さうとするのが、その意圖であつた。近松はこの事について、藝は實と虛との皮膜の間にあるといつてゐる。この考へから、古武士をも庶民に近く引寄せたのであつて、庶民はこれによつて庶民の武士道、町人道德を修養した。

近松門左衛門

謠曲が室町時代以降の武士道德を涵養したのに對し、淨瑠璃は江戸時代の庶民道德を涵養したものであるともいひ得よう。近松の淨瑠璃はいづれも結構脚色が巧妙で、その描寫もよく世態人情の機微を穿ち、文章も亦古典文學殊に謠曲に學んで、自由の筆を揮ひ、詞藻が誠に豐麗であるが、中にも時代物の「出世景清」「國性爺合戰」「曾我會稽山」「世話物の「冥途の飛脚」「天の網島」などが勝れてゐる。

○二宮の姉御前―二宮安清の妻、曾我兄弟の姉。

二宮の姉御前心靜かに合掌し、夫の武運長久、御狩の御留守預りて大切の役目禍のないやうに、取別け弟曾我の祐成五郎時致一萬箱王と申せし時、不動を工藤と聞き違へ、勿體なくも尊像を切り奉らんとまで、思ひ込んだる親の敵工藤左衞門祐經を首尾よう討たせたび給へ」と、只一筋の念願は感應さぞと著し。家來白崎八平太慌しく、「旦那より火急の御用、參りつけねど御居間へ」と御免も乞はず、大息ついで畏る。女房驚き、「何の御用か氣遣はし、御口上は」と問ひければ、「何れも同じ御奉公とは申しながら、かゝる御使身にとつての大難」と、卷込む暇の印の笄一通を差出せば、開いて見るや見もわかず、ばら〳〵涙の顏振上げ「御身も息災御武運も長久と祈りしはたつた今、御出仕の折までも云ひ語らひし數々は、捨詞か空言か恨めしの心や」と、卷いては解き讀んでは泣き、去狀顏に押當てて、思はずかゝつぱと身を投伏し、聲も惜しまず泣きゐたり。（曾我會稽山）

五

古學の復興

儒者の國文　これまで擧げて來た新興文學は、概ね庶民を對象としたもので、武士は一般にこれを擯斥し、儒學を奉じて漢文を重んじた。夙く家康が藤原惺窩・林道春等を登用して儒學を奬勵したので、儒學は間もなく全國に廣く普及するやうになり、既に寛永の頃近江に中江藤樹が出で、次いで岡山にその門人熊澤蕃山があり、元祿の前後には、江戸の荻生徂徠・新井白石・室鳩巢・雨森芳洲、京都の伊藤仁齋・同東涯、福岡の貝原益軒などが東西に輩出した。そして各、その奉ずる學派によつて儒教を說いたが、その傍、國文の隨筆・史論などを著して、その抱懷する主張・感想などを述べたものが多い。その文章は概ね平明な和漢混淆文で、武士の教養に資することが少くなかつた。中にも、白石の「讀史餘論」「折焚く柴の記」、鳩巢の「駿臺雜話」、益軒の「十訓」などが最もよく知られてゐる。

清福は、富貴の驕樂なる福にはあらず。貧賤にして時にあはずとも、其の身安く靜かにして、心に憂なき、これなむ清福とぞいふめる。暇ありて閑かに書を讀み古の道を樂しむは、これ清福のいと大いなる樂しみなり。（益軒、樂訓）

古學の復興　一方、國文學については、傳統文學の創作は既に前の時

代に於て沈滯の極に達したが、江戸時代に入つて、別に古典の研究が盛んになつた。まづ北村季吟が「源氏物語湖月抄」「枕草子春曙抄」の名著を出したが、元祿前後になつては、その頃隆昌を極めた儒者が、動もすれば國民的自覺を缺いて外來思潮を重んずる弊に陷つたのを慷慨して、わが古學を復興し、古道を究めて、わが國固有の純風美俗を審かにし、日本精神の眞髓を明かにしようとする運動が起つた。その第一聲を擧げたのが、大阪の下河邊長流で、彼は「萬葉集」の研究に從ひ、その高弟僧契沖は「萬葉集代匠記」を完成して、大きな業蹟を擧げた。次いで京都の荷田春滿は熱烈な國家的觀念のもとに、復古神道を唱へ、古道の研究を以て道德・政治の指針とする國學を樹立しようと圖つた。そしてこの企圖はその高弟賀茂眞淵等によつて、次の時代に興隆することとなつた。

和歌の革新　さて純文學については、この時代の初め、和歌の傳統的正系は細川幽齋に繼承せられ、その門下松永貞德によつて地下にも普及したが、舊套を出なかつた。時代の機運に乘じて和歌の革新を叫んだのは、江戸の戸田茂睡であり、次いで京阪の長流・契沖・春滿が古學復興の運動に沿うて、生氣に富む和歌を詠んだ。なほこの頃、讃岐に女流歌人井上通女があり、清麗な歌を詠んだ。

旅衣たちへだてても去らざるはさらばと言ひし人の面影　（戸田茂睡）
下野や那須野に茂る篠をとりて東男子は矢にぞはぐなる　（下河邊長流）
吹く風に迷ひし塵もうちしめり土の香すゞし夕立の雨　（僧契沖）
ふみ分けよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは　（荷田春滿）
箱根山ふたたび越えて見つるかなふもとの霧のあけぼのの空　（井上通女）

第九章　江戸時代後期——國學興隆時代

一　概說

江戸開幕以來既に百五十年、歴代將軍の奬勵により、文化は全國に普及するとともに、その主力は京阪より東漸して、今は江戸が文化の中心地となり、各種の庶民文學が主として江戸に於て創作せられることとなつた。しかしその實質は必ずしも好ましいものではなかつた。

文化の普及とともに、庶民の教養も亦次第に向上したが、彼等はその實力による社會的地位の向上を許されてゐない。士農工商、それ〴〵現在の階級に安住するばかりで、一歩もその埒外に出ることは出來ない。生活は安穩であり、教養は高まるが、地位は進まない。勢ひその餘剰勢力は歪められた方向に動くこととなる。この頃、通又は粋といふ語が流行した。通とは物知りの意、粋とは洗練せられた趣味の意であるが、その知識や趣味は正常のものではなく、歪められた、變態のものであつた。

二

俳諧の消長

天明調　芭蕉歿後の俳壇は、或は平俗に流れ或は遊戯に陷つて、一時沈滯したが、天明の頃、攝津の人與謝蕪村が出て、俳諧に新しい生命を與へ、所謂天明調が俳壇を風靡することとなつた。蕪村の句は潑剌たる向上精神から逃避した、洒落・滑稽・諷刺が彼等の慰めであつた。狂歌・川柳・洒落本・滑稽本などがその文學であつた。おしなべて遊戯文學と稱すべきもので、作家自らも戯作者と稱してゐた。かくて頽廢・墮落がその赴く方向であつた。

この一般的傾向に慷慨して、日本精神の作興に努力したのが、國學者である。彼等は先師の志を繼いで、古典を究め、古道を明かにするとともに、註釋に論文に隨筆に和歌に、その所見を披瀝して、國民の自覺を促した。德川幕府を瓦解に導いたものは遊戯文學の流行であり、明治維新の素地を作つたものは國學の興隆であつた。

多く材を人事・古典に求めて、これを繪畫的に寫生したもので、優美華麗、印象が頗る鮮明であるが、芭蕉の如き枯淡な幽寂味を求められない。その門からは高井几董が出た。なほ蕪村と同じ頃の著名な俳人には、炭太祇・大島蓼太・加藤曉臺・横井也有などがあり、也有は俳文に長じ、その文集「鶉衣」を殘してゐる。

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな　（蕪村）
牡丹散りてうち重なりぬ二三片　（同）
涼しさや遠く茶運ぶ寺扈從　（几董）
玄關にてお傘と申す時雨かな　（太祇）
更くる夜や炭もて炭をくだく音　（蓼太）
古琴や鼠出て行く春の暮　（曉臺）
蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居めづらしき夕べ、はじめてほのかに聞きたらん、又は長月の頃力なく殘りたるは、さびしきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊やり燒く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊に烈しきを、かの七賢の夜咄には、いかに團の隙なかりけん。（也有「鶉衣」百蟲譜の一節）

○七賢―晉の竹林七賢。

小林一茶　天明以後、文化・文政の俳壇は再び衰へて、平俗の句のみ横行したが、その中に異彩を放つたのは信濃の人小林一茶で、一茶はその悲慘な生活を反映して、切實な人間味を盛つた深みのある個性的な作を殘した。

いうぜんとして山を見る蛙かな　（一茶）
梟よのほゝんどころか年の暮　（同）

女流俳人　蕉風以後の俳諧は要するに衰へがちであつたが、女流には、明和の頃加賀の千代女、文化の頃榎本星布女、文政の頃花讃女、やや後れて岩代の多代女などが、うち續き秀れた俳人が出て、女性獨得の優しい細かい感情を詠み出した。

蝶々や何を夢みて羽づかひ　（千代女）
夕顔やもののかくれて美しき　（同）
雉子羽うつて琴の緒きれし夕かな　（星布女）
稲妻にまた見かへるや子の寢顔　（花讃女）

賣れ殘る市の庭木やほととぎす　（多代女）

三　狂歌・川柳の流行

江戸時代後期の俳諧は、自然よりも人事を詠み、閑寂よりも洒脫を喜ぶ傾向があつたが、この傾向を更に著しくあらはしたものに、狂歌と川柳がある。

狂歌　狂歌は嚴肅な和歌の規矩から逸脫して、直に庶民文學の中に入り、滑稽諧謔を弄んだもので、安永・天明の頃から殊に江戸に於て流行した。作者には唐衣橘洲・四方赤良・朱樂菅江・宿屋飯盛、女流の智慧內侍などがある。輕佻な當時の風潮を反映したものであるが、機智縱橫、輕妙洒脫、さすがに都會人の風趣を示したものがある。

鶴龜の齡を君にかすが山人が賀すなら我も賀さうよ　（唐衣橘洲）

さわらびが握拳を振りあげて山の橫つらはる風ぞ吹く　（四方赤良）

枝豆のさやけき影をめづるとてはぢけば口をあきの夜の月　（朱樂菅江）

一つとり二つとりては燒いてくふ鶉なくなる深草の里　（宿屋飯盛）

○かすが山―狂言未廣の小歌に「かさをさすならば春日山、とれも神の誓ひ、人がかさをさそなら、おれもかさをささうよ」

○深草の里―後成の歌に「夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなる深草の里」

ふる小袖人のみるめも恥かしや昔しのぶのうらの破れを　（智慧內侍）

狂文　俳諧に於ける俳文の如く、狂歌師の間に狂文が流行した。滑稽と諷刺を主にした卑俗な文である。

川柳　川柳の名は、前句附の點者柄井川柳から出たもので、川柳の選んだ前句附の中、前句を離れても意味の明瞭な附句を集めて、明和二年（二四二五）「誹風柳多留」初篇を出したのが世に行はれ、やがて附句だけが獨立した文學となつたのである。滑稽諧謔を旨とすることは狂歌と同樣であるが、彼には殆ど惡意がないが、此には鋭い皮肉があり、彼が放笑的であるのに對し、此は冷笑的である。しかし事物の解釋が人の意表に出たもの、世態人情の機微を巧みに穿つたものには、自ら微笑せしめるものがある。

○本降りになつて出て行く雨宿り　（柳多留）

○道問へば一度に動く田植笠　（同）

◎前句附―「少しのうちも隙はなきもの」といふ前句に「立ちながら泣く子に乳をのまする母」と附句をする類。

芭蕉翁ぽちやんといふと立留り　（同）

○ぽちやん―蛙の水に飛び込む音。四

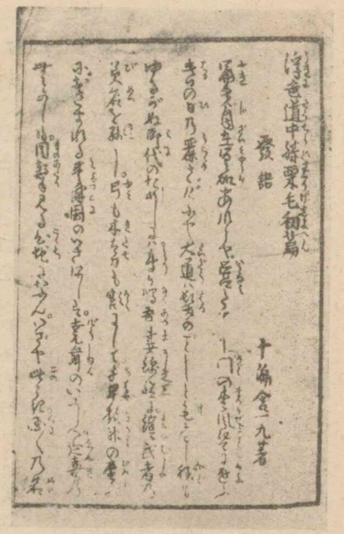
小說の變轉

京阪に於ける小說は、氣質本の後、殆どその跡を絕ち、これに代つて、江戸に於て別途に小說が發達して來た。

草雙紙　江戸に於ける最初の小說は草雙紙である。もと小兒相手の繪雙紙で、表紙の色によつて赤本・黑本・青本・黃表紙などといつたが、安永四年（二四三五）戀川春町の黃表紙「金々先生榮華の夢」が出て以來、大人の讀物として世相を滑稽的に描寫するものとなり、後には敵討物・怪談物を取扱ふやうになつた。

合卷草雙紙　草雙紙の內容が次第に複雜になつたので、これを合冊にした合卷が出來るやうになつた。柳亭種彥が代表的作家で、文政十二年（二四八九）初篇を出した「偐紫田舍源氏」がその傑作である。

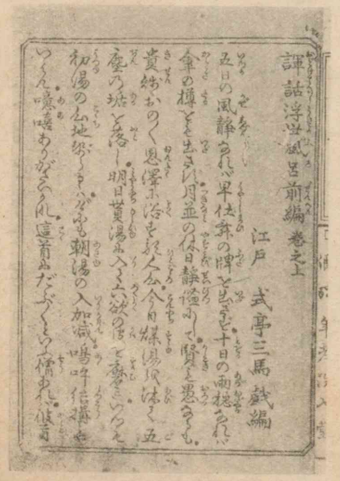
洒落本　草雙紙と竝んで、同じ頃に通人の世界を寫實的に取扱ふものが出來た。これを洒落本といふ。



道中膝栗毛

滑稽本　洒落本の系統を引いて、滑稽と洒落を旨として庶民生活を描寫するものに、滑稽本が出た。享和二年（二四六二）初篇を出した十返舍一九の「東海道中膝栗毛」、文化六年（二四六九）初篇を出した式亭三馬の「浮世風呂」、同八年（二四七一）初篇を出した同じく三馬の「浮世床」がその傑作である。

一九の作は旅行の失敗を取扱つて、變化に富んでゐるが、創意に乏しく、三馬の作は日常の生



浮世風呂

活を描いて單調であるが、觀察が鋭く皮肉を帶びてゐる。いづれも江戸庶民を主人公とし、その對話を主にして事件を展開させてゐる。

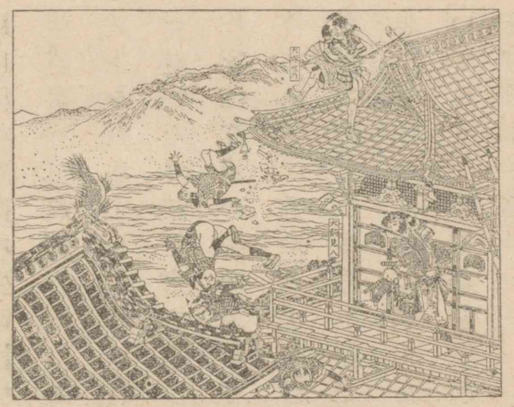
本居信仰にて、古ぶりの物學びなどすると見えて、物靜かに人柄よき婦人二人、おのおの玉簾の奥深く侍るだらけの文章をやりたがり、几帳の蔭に檜扇でもかざしてゐさうな氣位なり。けり子「かも子さん、此の間は何を御覽じます。」　かも子「はい、宇津保を讀み返さうと存じてをる所へ、活字本を求めましたから、幸に異同を訂してをります。さりながら舊冬は何かと用事にさへられまして、俊蔭の卷を半ば過ぎる程で捨て置きました。」　けり子「それはよい物がお手に入りましたね。」　かも子「けり子さん、あなたはやはり源氏でございますか。」　けり子「さやうでございます。賀茂翁の新釋と、本居大人の玉の小櫛を本に致して書入を致しかけましたが、俗びた事にさへられまして、筆を採る間がございませぬ。（浮世床）

人情本　滑稽本と同じ系統のもので、庶民の人情を描いた人情本が、この末期に作られたが、頽廢的な世相を反映して、一時の流行を見たに過ぎない。

讀本　以上の小說類がすべて教養の低い庶民を對象としてゐるのに對し、別に挿畫の少い、讀むことを主にした小說讀本が文化・文政の頃、讀書界を風靡した。これは相當教養のある作者が庶民よりも武士を對象として作つたもので、早く明和の頃、大阪の上田秋成が神祕的な怪談を書き綴つた「雨月物語」を出してゐるが、この代表的作家は江戸の瀧澤馬琴で、「椿說弓張月」「南總里見八犬傳」がその傑作である。殊に「八犬傳」は二十餘年の歲月を費して完成した、日本文學中最大の長篇小說で、雄大な構想絢爛な文藻を以て、仁義禮智忠信孝悌の八德の權化たる八犬士の波瀾極まりのない活動を描いてゐる。勸善懲惡思想により、善惡ともに鮮明に描いて、頗る道義的である。

犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福、我が

縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよとて、なまじひに擇み出されつ。他の憂を自の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、推辭て許さるべくもあらぬ君命重く彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の殘熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、溯洄は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟掛緒絶えて、進退既に谷まりし、敵にしあればいかでわれ、繫ぎとめんと跡の樹傳ふ如くさら〳〵と、登りはてたる三層の屋背には日柴翳すよしもなく、迭に透を窺ひつゝ、疾規あうて立つたる形勢、浮圖の上なる鶴の巣を、巨蛇のねらふに似たり。（八犬傳第四輯卷一）



里見八犬傳（版本挿畫）

○坂東太郎―利根川。

○日柴翳す―身を蔽ひ隱す。

五

淨瑠璃・脚本・謠ひ物

淨瑠璃　淨瑠璃は近松の歿後も大阪に榮えて、竹田出雲・近松半二などの作者が輩出し、出雲は「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」などの傑作を出し、半二も「本朝二十四孝」「阿波鳴門」などを出した。その文藻は近松に及ばないが、脚色の複雜な、舞臺效果の多い點で、一段の進歩を示してゐる。その後、上方の淨瑠璃は衰へて、安永・天明の頃、江戸に榮えて、福内鬼外の「神靈矢口渡」など出たが、往時の盛觀は再び見ることが出來なかつた。

歌舞伎　淨瑠璃に代つて興隆したのが歌舞伎である。歌舞伎は慶長年間出雲の巫女お國の創めたものといはれ、初めは舞踊と簡單な物眞似であつたが、次第に劇的に整ひ、元祿の頃には江戸に初代市川團十郎、京に坂田藤十郎の如き名優が出て來た。しかしその頃は淨瑠璃の全盛期で、秀れた歌舞伎脚本は未だ出なかつた。淨瑠璃の衰退に傾いた明和・安永の頃に至つて、上方に並木正三の

「三十石艪始」、その門下並木五瓶の「金門五山桐」などが出で、その後、文化・文政の頃、江戸歌舞伎が大いに進展して、作者に四世鶴屋南北が出た。南北は「東海道四谷怪談」の如き怪談物が得意で、庶民生活を巧みに描寫して、その間に輕妙な滑稽を挿む實世話物を創めた。やゝ下つて天保の頃、河竹默阿彌は純粹の世話物に優れた手腕を見せ、殊に盜賊を主人公とする白浪物を得意とした。默阿彌は明治時代まで活躍したが、「勸善懲惡覗機關」(村井長庵)などが、この期の傑作であつた。

謠ひ物　この時代に流行した謠ひ物の伴奏器樂には箏と三味線の二種あつた。箏による謠ひ物を箏歌又は地唄といひ、主として上方で流行し、その歌詞は古雅な組歌が多かつた。三味線による謠ひ物は、歌舞伎の劇場音樂から出た長唄と、義太夫節から派生した清元・常磐津・新内などがあり、主として江戸で流行し、その歌詞は淨瑠璃・歌舞伎から採つたもの又は江戸の風尙を反映した輕快なものが多かつた。

六　國學の興隆

賀茂眞淵　復古神道を唱へ國學を樹立した荷田春滿の門から出た賀茂眞淵は、わが國民が輕佻浮薄になつたのは、漢學が國民精神に浸潤して、太古純朴の美風を失はしめた結果である、儒教の說く虛飾に滿ちた人爲的道義をすてて、天地自然の大道に復らなければならない、その手段には、まづ上代國民の天眞から詠み出した歌を見るのがよいと考へて「萬葉集」の研究に心を潛め、その住居も田舍風に造つて縣居と稱した。その著述に「萬葉考」「冠辭考」「祝詞考」がある。

本居宣長　伊勢松阪の人本居宣長は、眞淵の勸めに從つて「古事記」を研究して、わが國固有の惟神の道を明らめようとした。その「古事

記傳」は三十五年間の心血を注いだ大著である。宣長はまた「古事記」研究の傍、廣く上古・中古の古典を究めて、貴重な註釋と評論を殘した。殊にその評論は、識見卓拔、條理極めて明徹で、皇道の本義を明らかにした「直毘靈」物語論の「玉の小櫛」、和歌論の「石上私淑言」などは、現代の評論もなほ及ばないものがある。たゞその文章は著しく擬古調である

本居宣長

が、それは平安末期以降の擬古文の如くに、前代文學の形式を模倣しようとしたのではなく、漢文訓讀の影響を受けて語彙・語法の亂雜した時文の弊を矯めて、正確純雅な古文を再現しようとしたのであつた。

皇大御國は、かけまくも畏き神御祖天照大御神の御生れませる大御國にして、よろづの國に勝れたる所以は、まづこゝにいちじるし。國といふ國に、この大御神の大御德かゝぶらぬ國なし。大御神、大御手に天つ璽を捧げ持たして、「御代々々に御しるしと傳はり來つる三種の神寶はこれぞ萬千秋の長秋に、吾が御子のしろしめさむ國なり」と、ことよさし賜へりしまに〳〵、天津日嗣高御座の、天地の共動かぬことは、はやくこゝに定まりつ。（直毘靈）

平田篤胤　秋田の人平田篤胤は、初め宣長の說を祖述したが、更に積極的に出て、國學を哲學的・宗教的に研究するとともに、古道によつて社會を指導しようとした。その著述は「古史傳」「古史徵」その他百餘部の多きに達し、いづれも當るべからざる氣魄が迸り、强烈な愛國的熱情が横溢してゐる。

かうしてわが國學は、春滿の復古神道の提唱によつて初まり、眞淵は詩人的直觀を以てこれを具體化し、宣長は學者的思索によつて

これを理論化し、篤胤は宗教的研究を經てこれを實踐化したのである。世にこの四人を國學の四大人といふ。

七　和歌の更新

和歌は既に前期に於て革新の機運に向つてゐたが、この期に入つては國學興隆の勢ひにつれて、全く面目を一新するに至つた。

萬葉派　賀茂眞淵は「萬葉集」の研究から出發して萬葉調の歌を詠んだ。その門に田安宗武・楫取魚彦等があり、女流の土岐筑波子・油谷倭文子・鵜殿餘野子は縣門三才女と稱せられ、小曾根紅子もこれに劣らぬ歌人であつた。

信濃なる菅の大野に飛ぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな　（賀茂眞淵）
大比叡や小比叡の雲のめぐり來て夕立すなり粟津野の原　（同）
みよし野のとつ宮處とめ來ればそことも知らに薄生ひにけり　（田安宗武）
天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり　（揖取魚彦）
花もやゝ匂はんと思ふ山里におぼつかなくも殘る雪かな　（土岐筑波子）

○とめ―尋ね求め。

かた山の蔦はふ道を分け來れば巖も秋になりにけるかな　（油谷倭文子）
しげりあふかげになみゐてならの葉の古きことしも語るけふかな　（鵜殿餘野子）
樣々にうかりし年のはてをさへ心よわくぞ惜しまれにける　（小曾根紅子）

江戸派　加藤千蔭・村田春海は眞淵の門から出て、古今と新古今とを折衷した流麗な歌を詠んだ。この歌風を江戸派といふ。千蔭には「うけらが花」、春海には「琴後集」の歌文集がある。

隅田川蓑きてくだす筏士に霞むあしたの雨をこそ知れ　（加藤千蔭）
雨はるゝゆふぐれ竹のおくしめてしめやかに鳴く鶯の聲　（村田春海）

新古今派　春滿の甥在滿はこれらに對し、新古今調を主張し、宣長も亦同じ歌風であつた。女流に春滿の妹蒼生子がある。

網代木にいさよふ波も立ちこめて霧に音する宇治の川づら　（荷田在滿）
青海原かすみわたりて千早振神代のまゝの春を見るかな　（荷田蒼生子）
さし出づるこの日の本の光より高麗もろこしも春を知るらん　（本居宣長）

平語派　京都の小澤蘆庵はまた平淡な調で自然のまゝの感情を詠

○ならの葉の―萬葉集を指す。

むことを旨として、たゞこと歌を主張した。その女流門下に矢部正子がある。

小鳥追ふ鳴子のなはに手をかけて竹のは山の夕日をぞ見る　（小澤蘆庵）
鳴く雁の聲もはるかにへだたりて翼きえ行く秋霧の空　（矢部正子）

桂園派　かうして樣々の新しい歌風の出た後、幕末歌壇の中心となつたのが香川景樹である。景樹は平語派の主張を更に進めて、眞情を率直に詠むべきこと、歌意と聲調とを合致せしめるべきことを主張した。この歌風が廣く天下を風靡して明治にまで及んだ。門弟一千餘、木下幸文・熊谷直好、女流の柳原安子・秋園古香・高畠式部などの名手を出した。

照る月のかげにて見れば山櫻枝うごくなり今か散るらん　（香川景樹）
富士のねを木の間〳〵にかへり見て松のかげふむ浮島が原　（同）
かはほりの飛びかふかげも靜まりて月になりゆく花の上かな　（木下幸文）
河口の澪のしるしにともす火の光も見えずかすむ夜半かな　（熊谷直好）

○桂園は景樹の號。

吹きすさぶ風の心もよわるらん柳の糸のなびく姿に　（柳原安子）
とひ行けばとひ來る友にあひにけり天きる雪の中道にして　（秋園古香）
鶯よしらべ合はさん曉の花の下かげしづけかりけり　（高畠式部）

幕末歌人　幕末にはまた桂園派以外に、獨自の詩境を詠んだ秀れた歌人が多く出た。良寛・橘曙覽・大隈言道、女流の野村望東尼・大田垣蓮月などがそれである。

歌や詠まむ手鞠やつかむ野にや出でむ心ひとつを定めかねつも　（良寛）
すく〳〵と生ひ立つ麥の腹すりて燕飛びくる春の山畑　（橘曙覽）
親泣けば子さへ泣くなり世の中のせんすべなさも何も知らずて　（大隈言道）
ともすれば君が御氣色そこなひて叱られし世ぞ今は悲しき　（野村望東尼）
おりたちて朝菜洗へば加茂川の岸の柳に鶯の鳴く　（大田垣蓮月）

荒木田麗女　以上列擧した歌人の外に、なほ特筆すべき女流作家に荒木田麗女がある。麗女は安永・天明頃の人、和歌・連歌・俳諧いづれにも堪能で、擬古物語の著作もまた十數部を超え、その錬達、前後に

比べるものもないが、その最も大きな業績は歴史物語「池の藻屑」の著作で「増鏡」の後を受けて、後醍醐天皇から後陽成天皇まで、吉野・室町時代約三百年の歴史を流麗な雅文で記してゐる。

第十章　明治・大正時代——新文學更生時代

一　概說

明治維新とともに舊弊は一切打破せられて、制度・文物すべて面目を一新することとなつた。文學も亦全く舊態を脱却して、新しく出發することとなる。顧みれば、明治・大正の御治世六十年間に於けるわが文化の進歩發達は、過去の數百年に値するほど著しいものであつたが、大觀すれば、凡そ次の四期を經過してゐる。

一、明治初期（十八年頃まで）國力充實期——新文學準備期

鎖國攘夷の迷夢を破つて、開國進取、盛んに西洋の文物を輸入して、世界列强の一に加はらうと全力を注ぎ、文學も亦西洋文明を紹介して、新文學創造の基礎をつくつた時代。この期に於ては、過去一千五百年の歳月を費して攝取消化した東洋的文化は殆ど打棄てられ、徒らに西洋文化の摸倣に陷らうとする餘弊はあつたが、その根柢は常に國力の充實、國運の發展にあつた。

二、明治中期（三十八年頃まで）國威發揚期——新文學發生期

極端な西洋文化の摸倣より反省して、國民的自覺を喚起し、强大國の侮りを禦いで、日清・日露の兩役にわが國威を發揚し、文學も亦新形式・新内容による各種形態の作品を創作して、西洋文學に匹敵しようとした時代。

三、明治後期（明治末年頃まで）民力涵養期——新文學展開期

臥薪嘗膽十年の後、西洋の最大國ロシアを敗つて、世界列强の一に加はり、明治初年以來の目標に一先づ到達した。暫く民力を養ひ國力を培ふこととなる。文學もその本質に顧みて、個人的に社會的に内省して、人生の眞を把握しようとした時代。

四、大正期（大正末年頃まで）新方向摸索期——文學動搖期

世界大戰により西洋諸國は疲弊し、わが國は世界七強國の一から五大強國の一となり、遂に三大強國の一となつた。今は歐米諸國に追隨するのではなく、東洋諸國の盟主となり、世界諸國に先行すべき立場となつた。追隨摸倣は容易であるが、先行創造は至難である。歐米諸思想混亂の餘波を受けて、危く昏迷に陷らうとしつゝ、わが國獨自の進路を摸索し、文學も亦樣々の動搖を生じつゝ、現實の眞諦を把握しようとした時代。

さて、かうした時代に於ける文學の作家及びその對象は、新知識の所有者でなければならない。今は武士・町人の差別もなく、四民平等となつたが、西洋文化の新知識は學校に於て授けられ、學校教育を受けてゐる書生・學生及びその卒業者が、まづ活動の表面に立つことになる。印刷術の急速な進歩によつて、新聞・雜誌の刊行が盛んになり、主な創作は皆これに掲載せられて、作者は多くなり、讀者層は愈擴大して行く。やがて有力な文學は忽ちにして全國的に普及するやうになり、文學の國民に影響することが極めて大とな

つた。

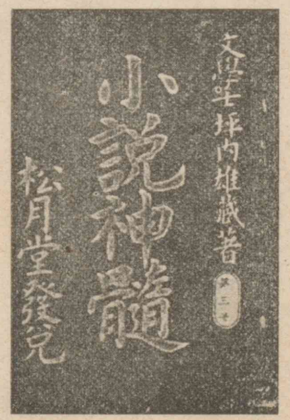
二　小說

初期の小說　明治・大正時代の文學を代表するものは小說であるが、初期の小說にはまだ文學的價値の高いものはなく、當時の歐化主義を反映した啓蒙的作品ばかりで、假名垣魯文の「西洋膝栗毛」などの如く、前代庶民文學の形態に從つて西洋事情を紹介する滑稽小說、矢野龍溪の「經國美談」、東海散士の「佳人之奇遇」、末廣鐵腸の「雪中梅」「花間鶯」などの如く、小說に託して自己の政治的理想を述べる政治小說、藤田鳴鶴の「繫思談」、坪內逍遙の「慨世士傳」の如く西洋文學を紹介する飜譯小說が、その主なものであつた。

○繫思談・慨世士傳―ともにその原書は英國小說家ロード・リットンの作。

新小說の黎明　明治十八年坪內逍遙は「小說神髓」を著して、文學の寫實主義を强調し、新時代の小說の進むべき道を明らかにするとともに、自らその所論を具體化した「當世書生氣質」を書いた。尤もこ

の作は戯作的要素が多くて、その實が伴はなかつたが、二十年二葉亭四迷の書いた「浮雲」は、平凡な人物の日常生活を捉へて、人物の性格や心理的葛藤を寫實的に描き出し、しかもその文章は清新な口語體で、誠によく新小説の面目を發揮した。



小説神髓（初版）

紅露時代　二葉亭の新作は、當時の讀書界にとつては、餘りに飛躍的であつた。明治二十年代の文壇を風靡したのは、尾崎紅葉と幸田露伴であつた。ともに西鶴の筆致を學んで新時代に適應しようとしたのであるが、兩者の作品は對蹠的であつた。紅葉が寫實を基礎として殉情的な女性を描いてゐるのに對し、露伴は思索を旨として豪快一徹な男性を描き、從つてその文章も彼は豐麗優美、此は雄健莊重であつた。紅葉の傑作に「伽羅枕」「多情多恨」「金色夜叉」があり、露伴の傑作に「風流佛」「五重塔」がある。紅葉は硯友社を率ゐて多くの門下を指導したが、露伴は孤獨を守り、やがて創作界から退いた。

樋口一葉　紅露時代に天才的女流作家樋口一葉が出た。一葉は明治二十九年僅か二十五歳でこの世を去つたが、その晩年の約四年間に二十餘篇の短篇小説を遺した。いづれも女性的な哀愁を帶びた佳品で、中にも「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」がその傑作である。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着が出來たれば、寸時も早う重ねさせたき親心「御苦勞でも學校まへの一寸の間に持つて行つてくれまいか、定めて花も待つて居ようほどに」と、母親よりの吩咐を、何も厭とも言切られぬ溫順しさに、唯はい〳〵と小包を抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木齒の下駄ひた〳〵と信如は雨傘さしかざして出でぬ。（たけくらべ）

飜譯小説　初期の飜譯小説は生硬蕪雜であつたが、明治二十年代に

は雅馴な飜譯が出た。森鷗外・二葉亭四迷・内田魯庵・上田敏などがその主な作家で、殊に鷗外の飜譯及び創作を集めた「美奈和集」は小説作家に大きな影響を與へた。

觀念小説その他　明治二十八年、硯友社同志の川上眉山が「うらおもて」を、紅葉門下の泉鏡花が「夜行巡査」を出して、こゝに觀念小説の名が現れた。これらは人生に對する一つの觀念を具體化して、殊に個人的の功罪を社會問題に關聯させて、悲慘な人生を描かうとするのであつた。やはり硯友社同志の廣津柳浪は同年「黑蜥蜴」を出して、觀念小説よりも更に深刻な悲劇を描いたので、この傾向のものを深刻小説と呼んだ。やゝ下つて三十二年に出た德富蘆花の「不如歸」、菊池幽芳の「己が罪」などは家庭的事件を取扱つて大衆の感傷をそゝつたもので、この種のものを家庭小説と呼んだ。

自然主義　家庭小説の類を通俗小説として斥け、明治後期の小説界に雄飛したのが自然主義の作家であつた。これはフランスのゾラ・モーパッサンの文學から影響を受け、評論界では島村抱月等の強く主張した説で、無理想の態度と無技巧の表現を以て、人生の眞をありのまゝに描寫しようとするものである。三十四・五年に「牛肉と馬鈴薯」「運命論者」を出した國木田獨歩がその先驅をなすものであり、島崎藤村・田山花袋が全盛期の代表的作家であつた。藤村には「破戒」「春」「家」があり、花袋には「生」「妻」「緣」の三部作がある。

吾輩ハ猫デアル

餘裕派、夏目漱石　自然派の作家が人生の眞を探求して得たところは、醜惡な或は陰慘な人生の半面で、人をして重壓を感ぜしめるものであつた。これに對して、もつと餘裕のある傍觀

的態度で、人生を靜觀し解釋しようとしたのが、俳諧趣味から出發した夏目漱石で、三十八年の「吾輩ハ猫デアル」翌年の「草枕」に著しくこの態度が現れてゐる。「彼岸過迄」「心」「道草」「明暗」などがその傑作である。

山路を登りながらかう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒兩隣りにちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行く許りだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容て、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。（草枕）

唯美派　四十二年「刺靑」翌年「少年」を書いた谷崎潤一郎、同じ四十三年「冷笑」を書いた永井荷風等は、人生を感覺的に觀察して、夢幻的な美の世界に浸らうとした。自然派・餘裕派の作品が人生のための藝術であるのに對し、これは藝術のための藝術を創造しようとしたもので、この派を唯美派といひ、その主張を新浪漫主義といふ。

新理想主義　四十三年創刊の雜誌「白樺」に據つた武者小路實篤・有島武郎・長與善郎等は、自然派が人生の虛僞を打破した跡をうけて、積極的に人生の善・美・光明を求めて、輝かしい理想を打樹てようとした。この傾向を新理想主義又は人道主義と呼び、大正期の文壇に大きな影響を與へた。武者小路の「お日出たき人」「世間知らず」、有島の「宣言」、長與の「盲目の川」などが、この派の代表作である。

新現實主義　大正期に入ると、世界大戰による西洋思想界混亂の餘波を受けて、わが思想界も激しい動搖を起し、文學界も亦これに從

つて樣々の傾向を生じた。勞動文學などがその著しい一であるが、この期の主流をなすものは、新現實主義の文學であつた。これは自然主義・新理想主義のいづれにも傾かず、忠實に現實を觀照して正しい主觀を樹立し、その上に立つて人生の再現を圖るものである。雜誌「新思潮」から出た菊池寛・芥川龍之介・久米正雄・豐島與志雄・山本有三、白樺派から出た里見弴・志賀直哉などが主な作者で、菊池の「忠直卿行狀記」「芥川の「鼻」「志賀の「暗夜行路」などが殊に著名な作品である。

三　戲曲

活歷物　明治初期の演劇にはまだ西洋文化の影響もなく、幕末以來の河竹默阿彌が引續いて活躍したが、從來の態度を改めて、荒唐無稽な歌舞伎劇を斥け、史實をそのまゝ舞臺に活現しようとした。この種のものを活歷物といふ。明治九年初演の「重盛諫言」がその代表的な作品である。

史劇　明治十九年、時の有力者が相寄つて演劇改良會を起し、依田學海・福地櫻痴などが脚本作家となつて、演劇の改善向上に努めた。その內容は概ね活歷物であつたが、福地櫻痴はその史實に拘泥する非演劇性を矯めて、歌舞伎劇との調和を圖つた。二十四年の「春日局」、三十年の「大森彦七」がその代表作である。

新史劇　坪內逍遙は新小說の提唱者であつたが、殊に演劇に於ける功績は最も大であつた。逍遙は二十六年「我が國の史劇」を著して、從來の缺點を說き性格描寫を鼓吹した。二十七年の「桐一葉」「二十九年の「牧の方」「三十年の「沓手鳥孤城落月」などは、歷史に材をとつて、人物の性格・境遇から生ずる悲劇的運命を描き、その說を具體化したものである。

新派劇　明治初年、政治小說と同樣の意圖から生まれた壯士芝居・書

生芝居は、小說界の進歩に伴うて次第に面目を改め、三十年代には「不如歸」「己が罪」「金色夜叉」など家庭小說の類を脚色上演して、歌舞伎劇と對立するに至つた。

樂劇　逍遙はまた三十七年「新樂劇論」を草して、新しい舞踊劇を提唱し、「新曲浦島」「新曲赫映姫」などの具體例を示した。

新劇　小說界の自然主義は劇界に反映して、新劇の運動となつた。娯樂本位の舊劇を斥けて、西洋の近代劇・社會劇・問題劇・思想劇等を擧げるもので、逍遙はまた三十九年文藝協會を設立してこれを實行に移し、四十二年小山内薫は自由劇場を創立して實績を示した。しかし脚本の新作は未だ少く、多くはイブセンなどの飜譯劇であつた。

劇作の勃興　わが演劇は明治年間に凡そ以上の經路を辿つて、今はその藝術的地位もほゞ定まるに至つた。從つて明治末年より大正期にかけて有力な劇作家が現れた。歌舞伎劇に於ける岡本綺堂、新劇に於ける中村吉藏がその著例で、前者には「修善寺物語」「番町皿屋敷」「後者には「牧師の家」「井伊大老の死」などがある。新現實主義の作家にも菊池寛・山本有三・眞山青果・久米正雄など脚本に力を注ぐものが輩出し、こゝに劇文學は全く面目を一新することとなつた。

四　和歌・俳句

御歌所　明治初期の歌壇は、高崎正風・税所敦子等が桂園派の歌風を守つてゐるに過ぎなかつたが、畏くも明治天皇には歌道に大御心を寄せさせ給ひ、明治四年宮中に歌道御用掛を置かせられ、次いで二十一年御歌所と改めさせ給ひ、新年歌御會の御儀を再興して廣く民間の詠進を許させ給うてより、和歌は興隆の機運に向つたのである。明治天皇・昭憲皇太后が歌聖にましまし、數々の御製・御歌

に尊い大御心・大御旨を示し給うたのは畏い極みである。

わたの原波間はなるゝ月影に海人の磯屋の數ぞ見え行く　（高崎正風）

青柳の窓うつ音も靜まりて雨になり行くおぼろ夜の月　（税所敦子）

歌壇の三宗　さて明治・大正の歌壇は幾多の流派に分れて來たが、その源流に溯れば、凡そ三系統となる。その一は明治歌壇の開拓者落合直文の「淺香社」から出たもの、その二は穩健な歌風を持した佐佐木信綱の門をくゞるもの、その三は歌界の革新を叫んだ正岡子規の「根岸短歌會」から發展したものである。

緋縅の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞ思ふ山櫻花　（落合直文）

藥うる家の板戸をたゝく子の髪ふき亂すさ夜嵐かな　（佐々木信綱）

物干の衣の袖に蟬鳴きて晝照草に日はゆふべなり　（正岡子規）

直文門下　直文門下は多士濟々、まづ與謝野鐵幹は新詩社を結んで雜誌「明星」を出し、歌界革新の急先鋒となり、鐵幹が男性的な豪健の歌を詠めば、その妻晶子は傳統を破つた情熱的な歌を詠んで、一世を風靡した。この門下また多士濟々、窪田空穗・吉井勇・北原白秋・石川啄木・茅野雅子・山川登美子などがあり、中にも啄木は實生活に卽した切實な感情を歌ひ、最も異色を發揮した。鐵幹と同門の尾上柴舟・金子薫園は明星派に對して沈靜な自然觀照を旨とし、殊に柴舟は次第に思索的傾向を加へて來た。柴舟の若葉會からは前田夕暮・若山牧水、薫園の白菊會からは土岐哀果が出た。中にも牧水は生活と藝術と渾然融合した歌を詠んだ。

韓にしていかでか死なむわれ死なばをのこの歌ぞまたすたれなむ　（與謝野鐵幹）

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき　（與謝野晶子）

たはむれに母を背負ひてそのあまり輕きに泣きて三歩あゆまず　（石川啄木）

つけすてし野火の煙のあか〳〵と見えゆく頃ぞ山はかなしき　（尾上柴舟）

丘に立ちて呼べば帆の人舟緣に遠きわれ見る秋晴れにして　（金子薫園）

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ國ぞ今日も旅ゆく　（若山牧水）

信綱門下　信綱は今も健在で、久しく門下を指導統制して來てゐるが、その門下には川田順・木下利玄・大塚楠緒子・九條武子などが出てゐる。

子規門下　俳句から出發した純客觀的寫生と萬葉風の格調とを說いた子規は早く歿したが、伊藤左千夫等がこの歌風を承けて雜誌「アララギ」を起し、大正二年左千夫の歿後は、島木赤彥・齋藤茂吉等がこれを繼承した。

砂原と空と寄合ふ九十九里の磯行く人ら蟻のごとしも　（伊藤左千夫）

ある日わが庭のくるみに囀りし小雀來らずさえかへりつゝ　（島木赤彥）

俳句　俳句は江戸末期以來久しく月並調のみ行はれてゐたのを、明治二十五・六年の交、子規が新聞「日本」に俳話・俳論を揭載して、蕪村の客觀的・繪畫的俳風を推稱し、俳句の寫生道を樹立した。これを日本派といふ。二十七年大野洒竹・佐々醒雪等は筑波會を、翌二十八年角田竹冷等は秋聲會を起してこれに對峙したが、間もなく衰へて、俳壇は全く日本派に統一せられた。たゞ子規の歿後は、高弟の間に異見を生じ、高濱虛子が「ホトトギス」に據つて、子規の正統を繼承してゐるのに對し、河東碧梧桐は明治の末年、十七字詩形・季題といふ俳句の二大約束を破つた新傾向句を提唱し、大正の初年荻原井泉水がまた碧梧桐と異なつた新傾向句を提唱した。

藤の花長うして雨降らんとす　（正岡子規）

日のあたる硯の箱や冬の蠅　（同）

秋の湖や何を煙らす一漁舟　（高濱虛子）

工場の建ちひろがる晉のけふも西風の晴れ　（河東碧梧桐）

五　長　詩

新體詩の發生　明治初期、西洋文學の影響を受けて、長詩といふ新しい詩形が生まれた。十五年、外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎の三人の編んだ「新體詩抄」がその先驅をなすものである。この詩集は

テニスン・ロングフェローなどの譯詩が主となつてゐるが、編者の自作をも加へてゐる。

新體詩の完成　「新體詩抄」は未だ形式も蕪雜であつたが、その後幾つかの詩集が出來て、次第に整齊せられ、二十二年森鷗外等の譯詩集「於母影」が出て、近代詩の內容を示すや、北村透谷は二十六年雜誌「文學界」を主宰して、熱烈な詩情を以て近代人的苦惱を表現した。

若菜集

次いで三十年島崎藤村が優雅清麗な詩集「若菜集」を出すに及んで、新體詩は完成に達したのである。藤村が在來歌謠の詩趣を生かした纖細哀婉の抒情詩を詠んだのに對し、これと竝んで世に出た土井晚翠は漢詩の格調を採り西歐浪漫詩の詩想を

容れた雄渾沈痛の敍事詩を詠んだ。藤村のその後の詩集には「一葉舟」「夏草」「落梅集」があり、晚翠の詩集には「天地有情」「晚鐘」がある。

處女ぞ經ぬるおほかたの
われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河をながむれば

水靜かなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の櫻の花影に
われは處女となりにけり（若菜集）

象徵詩　藤村・晚翠の後をうけた薄田泣菫・蒲原有明は近代人の纖細な感情、俊敏な感覺を象徵的に表現して、長詩の新しい境地を開拓した。泣菫の詩集に「暮笛集」「ゆく春」「白羊宮」、有明の詩集に「草わかば」「獨絃哀歌」「春鳥集」などがある。なほこの頃に出た上田敏の譯詩集「海潮音」が象徵詩の發展に影響を與へたことも少くない。

朝なり、やがて濁川
ぬるくにほひて、夜の胞を
ながすに似たり、しら壁に——

いちばの河岸の竝み藏の——
朝なり濕める川の靄、
川の面すでに融けて、しろく、

たゆたにゆらぐ壁のかげ、
あかりぬ、暗きみなぞこも。——

大川がよひさす潮の
ちからさかおすにごりみづ。（春鳥集）

口語詩・自由詩　四十年頃には、自然主義傾向の浸潤と共に、長詩も七五調の文語詩を離脱して、定律を破つた自由形式の口語詩が起り、川路柳虹・相馬御風・三木露風・北原白秋等が相次いで試みた。そしてやがて明治の末、大正の初年には更に擴大して、鄕土詩・童謠等が流行するやうになつた。北原白秋・西條八十・野口雨情などがその作家である。

第十一章　現　代

昭和の文學も、今日までは大體に於て大正の文學を繼承して來た。しかし東西兩文化を融合した世界的な新文學は、この昭和の大御代に於て創造せられなければならない。現代の狀勢を察するに、西洋文化の既に飽和狀態になつたことは、東洋文化の飽和狀態になつた平安時代初期に似通つてゐるが、これを日本化する任務は、平安盛期の如く、上層階級のみに課せられてゐるのではない。東洋文化の一般化につとめた鎌倉時代には民衆の教養が甚だ低かつたが、現代の教育は全般に普及してゐる。各種の文化を綜合集成することは、室町時代のやうであつて、それよりも遙かに高級でなければならない。

昭和初頭に於ける所謂圓本の流行は、東西新古の文學を極めて容易に多量的に普及せしめた。大衆文學・民謠・國民歌謠等の流行は新しい國民文學創造の段階を作つてゐる。更に思想的には滿洲事變・支那事變によつて、世界的國民自覺が著しく高まりつゝある。新文學の誕生も近い將來のことであらう。われ〳〵は固より文

學の創作家にならうとするのではない。たゞ文學を正しく鑑賞し批判して、わが國民精神の涵養につとめればよい。そして正しく鑑賞し批判する善い讀者が多ければ、それだけ善い文學が多く生まれ、われ〳〵の期待する大文學が早く誕生することとなるのである。

新修女子國文學史　終

である。

新修女子國文學史 終

國文學展開系統表

（括弧を施したのは現在殆ど創作せられないもの）

文學／時代	大和前期	大和後期	平安初期	平安盛期	平安末期	鎌倉	吉野・室町	江戸前期	江戸
戯曲							謠曲 狂言 幸若	淨瑠璃	歌
歌謠	上代歌謠	神樂 和歌	神樂 催馬樂 和歌		今樣 和歌	宴曲 和歌 連歌	小歌 連歌 俳諧	俳諧	和
散文	上代說話	〔編史〕	物語、歌物語 日記	物語 日記	傳說文學 歷史文學	說話文學 日記紀行 戰記文學	お伽草子	浮世草子	讀
評論			歌集序	歌論 隨筆		連歌論 隨筆		俳論	
祝詞宣命	祝詞	祝詞 宣命							

である。

新修女子國文學史 終

開系統表

（括弧を施したのは現在殆ど創作せられないもの）

初期	平安盛期	平安末期	鎌倉	吉野・室町	江戸前期	江戸後期	明治・大正	現代
樂								
樂			宴曲	小歌		箏歌		（箏歌）
						三絃樂		（三絃樂）
		今様						童謡民謡
		和歌	和歌			和歌	長詩	長詩
							和歌	和歌
			連歌	連歌				
				俳諧	俳諧		俳句	俳句
				謡曲				（謡曲）
				狂言				（狂言）
				幸若	浄瑠璃			（浄瑠璃）
						歌舞伎		（歌舞伎）
							新劇	新劇
物語	物語							
物語	日記	傳説文學						
		歴史文學	説話文學					
			日記紀行					
			戰記文學					
				お伽草子	浮世草子	讀本類	小説	小説
集序	歌論							
	隨筆		隨筆					文學論
			連歌論		俳論			文學論
			隨筆					隨筆
								（祝詞）

國文學史年表

（一、皇紀は即位の御年又は年號の元年を示すのを原則とす。
（二、括弧を施した作者・作品は大體の年代を示す。

時代	御代數	天皇	年號	皇紀	作者（歿年）	作品	事項
大和前期	1	神武		元		○（神話）○（歌謠）	○元年大和國橿原に御即位
	10	崇神		五六四		○（傳說）○（祝詞）	○六五年任那國入貢
	12	景行		七二一	○四三年日本武尊		
	15	應神		九三〇			○一六年漢學傳來
	17	履中		一〇八〇			○四年諸國に史官を置く
	21	雄略		一二一六			○文運大に進む
	29	欽明		二九九			○一四年佛教傳來
大	33	推古		一三五三			○一三年憲法十七條 ○一六小野妹子遣隋使 ○二九年天皇記、國記撰修
	36	孝德	大化	一三〇五			○二年大化改新
	38	天智		一三三八			○大津遷都
	41	持統		一三五〇	○（額田王）		

時代	御代數天皇	年號	皇紀	作者（歿年）	作品	事項
和	42文武	（即位）	一三七		○元年即位宣命	
		大寶	一三六一			○元年大寶律令
後	43元明	和銅	一三六八	○三年？人麿	○五年古事記 ○六年風土記詔	○三年奈良遷都
期	44元正	靈龜	一三七五		○元年播磨風土記	
		養老	一三七七	○七年太安萬侶	○四年日本書紀 ○五年常陸風土記	
	45聖武	神龜	一三八四	○五年大伴坂上郎女		
		天平	一三九九	○三年旅人 ○四年？蟲麻呂 ○五年？憶良 ○一九年？赤人	○五年出雲風土記 ○（神樂）	○六年興福寺建立 ○一三年諸國國分寺設置 ○一五年東大寺建立
		天平寶字	一四一七	○元年諸兄	○三年？萬葉集	
	50桓武	延曆	一四四三	○四年家持		
平安初期		同	一三			
		同	一四五四		○一六年續日本紀	○一三年平安遷都
	52嵯峨	弘仁	一四七〇		○（催馬樂）	○五年凌雲集 ○九年文華秀麗集
	57陽成	元慶	一五三七	○四年業平		
	59宇多	寛平	一五四九	○二年遍昭		○六年道眞遣唐使辭退
	60醍醐	延喜	一五六一	○五年友則 ○二一年躬恒	○五年古今集 ○（竹取物語） ○（伊勢物語）	○勅撰和歌集初まる

期						
61朱雀	承平	一五九一		○五年土佐日記		
	天慶	一五九八	○二年忠岑 ○九年貫之			
平安盛期	62村上	天曆	一六〇七	○五年後撰集 ○（大和物語）		
	64圓融	永觀	一六四三	○元年源順	○（宇津保物語） ○（蜻蛉日記）	
	66一條	寛和	一六四五	○二年好忠	○（落窪物語）	
		正曆	一六五〇	○元年元輔 ○二年能宣		
		長保	一六五九		○（拾遺集）	
		寛弘	一六六四		○（源氏物語） ○（枕草子） ○（和泉式部日記） ○（紫式部日記）	
	68後一條	長和	一六七三	○五年紫式部		
		萬壽	一六八四			○四年道長薨去
平安	同	長元	一六八八		○（榮華物語） ○（大鏡）	
	69後朱雀	長久	一七〇〇	○二年公任	○（新撰髓腦） ○（今樣）	
	70後冷泉	永承	一七〇六	○（能因）	○（狹衣物語） ○（濱松中納言物語）	
		康平	一七一八	○（和泉式部）○（赤染衛門）	○（堤中納言物語） ○（更級日記）	
	71後三條	延久	一七三九			○元年記錄所設置
	72白河	承保	一七三四	○四年隆國	○（今昔物語集）	

時代	御代數 天皇	年號	皇紀	作者（歿年）	作品	事項
末期		應德	一七四四		○三年後拾遺集	
	73 堀河	寛治	一七四七			○元年より白河法皇院政
	75 崇德	大治	一七六六	○四年俊頼	○二年金葉集	
	76 近衛	康治	一八〇三	○元年基俊		
		仁平	一八一一		○元年詞華集	
	79 六條	仁安	一八二六		○（梁塵秘抄）	
	80 高倉	嘉應	一八三九		○二年今鏡	
	82 後鳥羽	文治	一八四五		○四年千載集	○元年平家滅亡
鎌倉	同	建久三	一八五二	○元年西行		○三年頼朝鎌倉に幕府を開く
	83 土御門	建仁	一八六一	○元年式子內親王 ○二年寂蓮		
		元久	一八六四	○元年俊成	○二年新古今集	
		建永	一八六六	○元年良經	○（保元物語） ○（平治物語）	
	84 順德	建曆	一八七一		○（平家物語） ○二年方丈記	
		建保	一八七六	○元年鴨長明 ○四年有家	○四年宇治拾遺物語	

倉時代		承久	一八七九	○元年實朝	○（海道記） ○（住吉物語）	○三年承久の變
	86 後堀河	安貞	一八八七	○元年通具		
	87 四條	文曆	一八九四		○元年新勅撰集	
		嘉禎	一八九五	○三年家隆		
		仁治	一九〇〇	○二年定家	○（東關紀行）	
	89 後深草	建長	一九〇九		○三年續後撰集 ○四年十訓抄 ○六年古今著聞集 ○（宴曲） ○（源平盛衰記）	
	90 龜山	文永	一九二四		○二年續古今集	○一一年文永の役
	91 後宇多	弘安	一九三八	○六年阿佛尼	○元年續拾遺集 ○（十六夜日記）	○四年弘安の役
	92 後二條	嘉元	一九六三		○元年新後撰集	
	95 花園	正和	一九七二		○元年玉葉集	
	96 後醍醐	元應	一九七九		○二年續千載集	
		嘉曆	一九八六		○元年續後拾遺集	
		元弘	一九九一		○（水鏡）	○元年元弘の變
	同	建武	一九九四		○（徒然草）	○元年建武中興
	97 後村上	延元	一九九六		○四年神皇正統記 ○（增鏡）	

時代	御代數	天皇	年號	皇紀	作者（歿年）	作品	事項
吉野・室町時代			正中	二〇〇六	○五年兼好　○九年親房 ○十四年？救濟	○元年風雅集　○一一年菟玖波集 ○一四年新千載集　○一九年新拾遺集　○（太平記）	○一二年連歌集勅撰
	98	長慶	文中	二〇〇三	○元年頓阿○三年小島法師	○（會我物語）　○（義經記）	
			弘和	二〇〇四		○元年新葉集	
	99	後龜山	弘和三	二〇四三		○三年新後拾遺集	
			元中	二〇四四	○元年觀阿彌　○二年宗良親王　○五年良基		
	100	後小松	應永	二〇五四		○（謠曲）　○（狂言）　○（幸若）	
	102	後花園	永享	二〇八九		○一一年新續古今集　○（お伽草子）	○勅撰和歌集終る
			嘉吉	二〇一一	○三年世阿彌		
	103	後土御門	文明	二二九			○一二年桃井直詮（幸若丸）歿
			長享	二四七		○二年水無瀨三吟百韻	
			明應	二五三		○四年新撰菟玖波集	
	104	後柏原	文龜	二六一	○二年宗祇		
			永正	二六四		○一一年犬筑波集　○一五年閑吟集	
	105	後奈良	天文	二九二	○一八年守武○　二年宗鑑	○九年守武獨吟千句	

時代	御代數	天皇	年號	皇紀	作者（歿年）	作品	事項
江戸前期	107	後陽成	慶長八	二三六三	○一五年幽齋	○（古淨瑠璃）	○八年家康江戸に幕府を開く
	110	後光明	承應	二三二三	○二年貞德		
	111	後西	萬治	二三二八		○三年浮世物語	
	112	靈元	寛文	二三三一		○六年お伽婢子	
			天和	二三四一	○二年宗因	○二年一代男	
			貞享	二三四四	○三年長流	○三年春の日・五人女・出世景清	○義太夫節行はれる
	113	東山	元祿	二三四八	○三年了意　○六年西鶴 ○七年芭蕉　○十年捨女 ○一四年契沖	○元年永代藏・萬葉集代匠記　○二年奥の細道　○三年幻住庵記　○五年世間胸算用	○一四年赤穗義士復讐
			寶永	二三六四	○元年去來　○二年季吟 ○三年茂睡　○四年其角・嵐雪	○二年風俗文選	
	114	中御門	正德	二三七一	○四年益軒　○五年許六	○五年國性爺合戰・世間息子氣質	○四年義太夫歿
			享保	二三七六	○九年近松　○十年秋色女 ○一一年園女	○元年世間娘容氣　○三年曾我會稽山	
	115	櫻町	元文	二三九六	○元年其磧・春瀟　○二年通女		○長唄流行す
			寛保	二四〇一	○二年海晋		
	116	桃園	寛延	二四〇八		○元年假名手本忠臣藏	
	同		延享	二四〇四		○三年菅原傳授手習鑑	

江戸後期

御代數天皇	年號	皇紀	作者（歿年）	作品	事項
	寶暦	二四二一	○元年在滿 ○二年倭文子 ○六年竹田出雲		○常磐津行はれる
117 後櫻町	明和	二四二四	○六年眞淵 ○八年宗武・太祇	○五年雨月物語・阿波鳴門	
118 後桃園	安永	二四三三	○四年千代女	○四年金々先生榮華夢	
	天明	二四四一	○三年也有・蕪村 ○六年蒼生子 ○七年蓼太	○五年鶉衣刊 ○十年古事記傳	
	享和	二四六一	○元年蘆庵・宣長 ○二年唐衣橘洲	○二年東海道中膝栗毛	○淸元行はれる
	文化	二四六四	○三年麗女 ○四年智慧內侍 ○五年五瓶・千蔭 ○六年秋成 ○一三年京傳	○三年椿説弓張月 ○六年浮世風呂 ○一一年八犬傳 ○一二年田舍源氏	
120 仁孝	文政	二四七八	○五年三馬 ○六年四方赤良 ○十年一茶 ○一一年朱樂菅江 ○一二年南北		○一二年頼山陽の日本外史成る
	天保	二四九〇	○元年花讃女 ○二年良寛・一九 ○一三年種彥・篤胤 ○一四年景樹		
121 孝明	嘉永	二五〇八	○元年馬琴		○六年米使節ペルリ來る
	文久	二五二二	○二年直好 ○三年多代女		
122 明治	明治元	二五二八	○元年言道・曙覽 ○八年蓮月	○三年西洋膝栗毛 ○九年重盛諫言 ○一五年新體詩抄 ○一六年經國美談	○二年東京奠都 ○五年學制頒布

明治・大正時代

御代數天皇	年號	皇紀	作者（歿年）	作品	事項
	明治一八	二五四五		○一八年小說神髓・當世書生氣質・慨世士談・繫思傳 ○一九年佳人之奇遇・雪中梅 ○二〇年浮雲 ○二一年花間鶯	○一九年演劇改良會 ○二一年御歌所御再興
	二三	二五四九	○二五年鳴鶴 ○二六年默阿彌・魯文	○二二年風流佛・於母影 ○二三年伽羅枕 ○二四年五重塔・春日局 ○二五年美奈和集 ○二六年わが國の史劇	○二二年憲法發布 ○二三年教育勅語御下賜
	二七	二五五四	○二七年透谷 ○二九年鐵腸・一葉	○二七年たけくらべ・透谷集・桐一葉 ○二八年十三夜・うらおもて・黒蜥蜴・夜行巡査 ○二九年多情多恨・牧の方 ○三〇年金色夜叉・孤城落月・大森彥七・若菜集	○二七年日清戰役
	三一	二五五八	○三三年敦子 ○三四年福澤諭吉 ○三五年子規・樗牛 ○三六年紅葉・直文	○三一年歌よみに與ふる書・一葉舟・夏草 ○三二年不如歸・己が罪・天地有情・暮笛集 ○三四年牛肉と馬鈴薯・ゆく春・落梅集 ○三五年運命論者・草わかば	
	三七	二五六四	○三九年櫻痴	○三七年新樂劇論・新曲浦島 ○三八年吾輩ハ猫デアル・新曲赫耶姬・春鳥集・海潮音 ○三九年草枕・破戒・白羊宮	○三七年日露戰役
	四一	二五六八	○四一年眉山・獨歩 ○四二年四迷・學海・登美子 ○四三年美妙齋・楠緒子 ○四九年正風・啄木	○四一年春・生・妻 ○四二年刺青・お目出たき人々 ○四三年少年・冷笑・家・牧師の家 ○四四年修善寺物語	○四三年韓國併合
123 大正	大正元	二五七二	○二年左千夫 ○五年敏・漱石	○元年世間知らず ○三年心 ○四年宣言 ○五年明暗・鼻	○四年世界大戰
	六	二五七七	○六年醒雪 ○七年抱月	○六年和解 ○七年忠直卿行狀記 ○九年井伊大老の死	
	一一	二五八二	○一一年鷗外 ○一二年武郎 ○一四年利玄 ○一五年鳴雪・赤彥	○一一年暗夜行路	

時代	御代數	年號	皇紀	作者（歿年）	作品	事項
現代	124 今上					
		昭和元	三五六	○二年蘆花・龍之介、○三年柳浪・薫・牧水・武子、○五年花袋		
	六		三五九一	○十年逍遙・鐵幹		○六年滿洲事變
	二		三五九六	○一二年碧梧桐		○一二年支那事變

昭和十四年一月十六日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和十三年十月廿五日印刷
昭和十三年十一月一日發行
昭和十四年一月五日訂正再版印刷
昭和十四年一月十日訂正再版發行

新修女子國文學史
定價金六拾錢

不許複製
著作權所有

著作者　佐成謙太郎
京都市上京區丸太町通堀川西入西丸太町百七十一番地
發行者　星野敬一
京都市中京區壬生坊城町六番地
印刷所　天進社印刷所
京都市上京區丸太町通堀川西入
發行所　星野書店
電話西陣④三〇三五・四八三七番
振替口座大阪四九四九一番

中等教科書協會

龍谷

広島大学図書
2000035909